

一日一話シリーズ

読みきかせ

小学館版

日本昔ばなし

②



一日一話5分間で お子さまの心に残るお話

小学館のデラックス版アニメ絵本

西本鶏介・著



一日一話シリーズ

読みきかせ

小学館版

日本昔ばなし

①②③④⑤⑥巻 好評発売中!

◆各巻とも日本各地に伝承されている昔話30話を収録!



1巻



2巻



3巻



4巻



5巻



6巻

西本鶏介・著

[B20取判]
140ページ

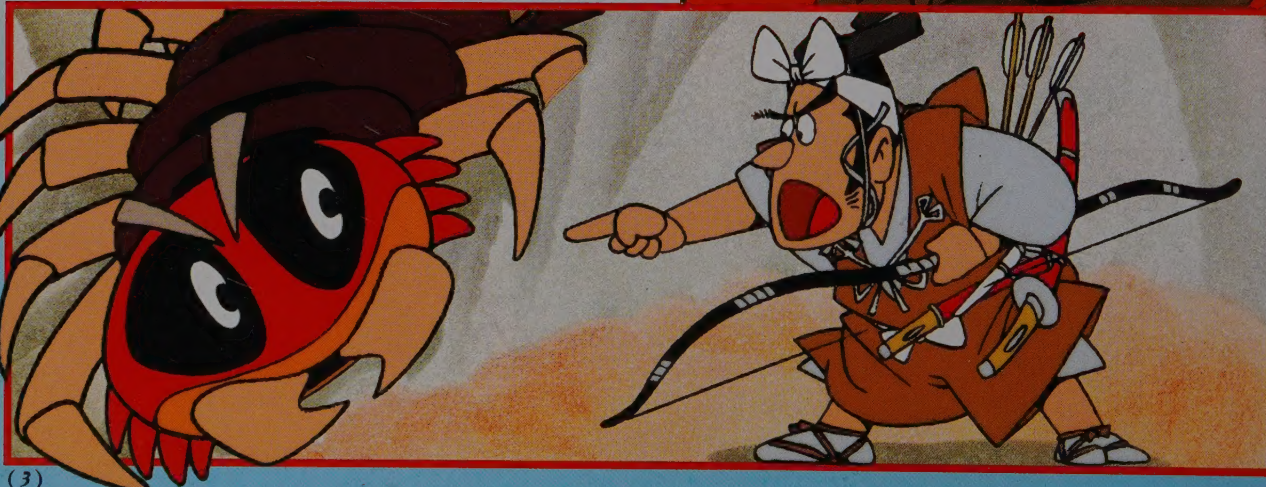
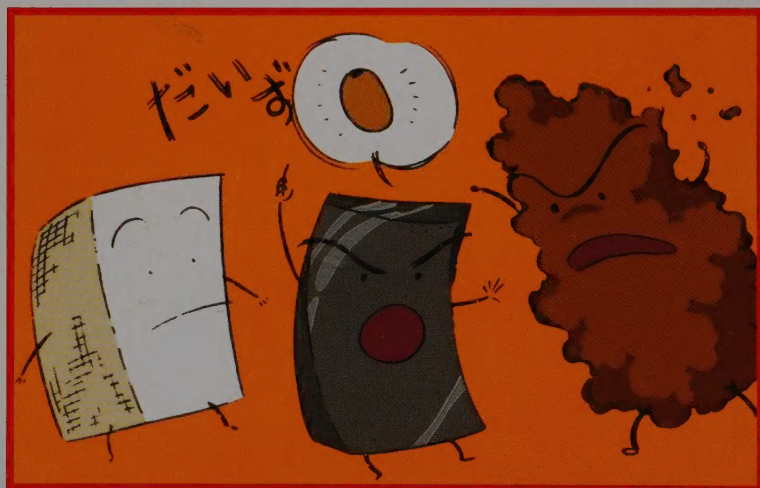
ちえくらべ、力くらべ、とんち話、笑い話、
動物の恩返し、など珍しい話ばかり。どのお
話も日本人のやさしい心を伝え、生活の知恵
を教えてください。幼児でもよく理解でき、
読みきかせに最適の大人気シリーズです。

読みきかせ

小学館版

日本昔ばなし

2



■この本の使い方■

一日一話・5分間読みきかせてください

昔話は身近で貴重な

人生ドラマ

—— 西本 鶏介 ●



昔話がおもしろいのは、特別の人間でない当り前の人間の夢がたっぷり盛りとまれているからです。どんなに貧しく、力のない者でも昔話の中では、とてつもない金持ちになることができ、大いばりしている人間や欲ばり人間をやっつけることができます。

神秘的でロマンチックな昔話にしても、バイタリテイあふれる昔話にしても、そこには人間とはなにかの本質が見事に描かれています。しかも、それは、一人の人間の自我を通して生み出されてきたものでなく、同時代に生きる人々の共通の願いから生み出されたものです。だからこそ、文字や書物を通さず、口から耳への伝達だけで何百年もの間、忘れられることなく生き続けてきたのです。

昔はだれもが同じ立場で肩を寄せあい、助けあうことによって生活が成り立っていました。そのためには人はどうあるべきか、どうすれば仲よく生きていけるのか、それを昔話で語り聞くことによつて学んできました。どんな架空の話でも、身近で、貴重な人生のドラマであるからこそ子どもも大人も共感をもって聞くことができるのです。

たからものを くれた おばけ



と

んと むかし、ある ところにお
じいさんと おばあさんが 住んで
いました。

毎日、おじいさんは まいにち 山へ やま 木を き 切り
に、おばあさんは 川へ かわ せんたくに出
かけました。

ある 日、おばあさんが 川へ かわ 行くと、
川上の かわかみ ほうから、ぴかぴか 金色に きんいろ 光
る、大きな おお はこが ながれて きました。
おばあさんが びっくりして、

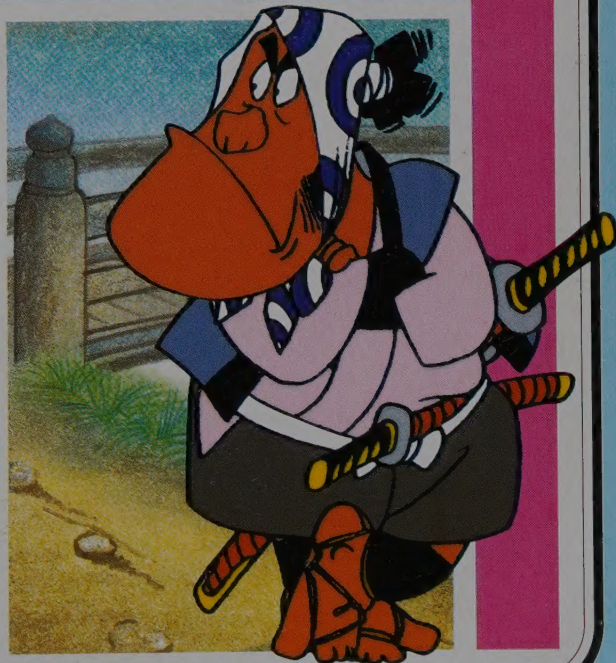
「こつちへ こい、こつちへ こい。」
と よんだら、おや ふしぎ。はこは ひ

もくじ

◆ たからものを くれた おばけ	5
◆ うそつき名人	10
◆ 頭を そられた 男	12
◆ 友だちに あげた りんご	18
◆ ばけものを たいじした ねこ	22
◆ お花と ごんべえ	28
◆ 鳥に なった おばあさん	32
◆ だまされた おおかみ	36
◆ 一つだけ のこった まんじゅう	42
◆ あごと かかとの つけかえ	44
◆ とうふと おみその けんか	48
◆ おぼうさんに ばけた 古だぬき	52
◆ 人を 食わなくなつた おに	58
◆ 火太郎と 長太郎	62
◆ どっちが 本もの	68
◆ 大工の 神様と 天人	70
◆ かっぱの くれた たからもの	74



◆ お金入りの 米だわら	80
◆ まめに なれない とうふ	84
◆ えびと たこと ふくの おどろ	88
◆ 負けた 大むかで	94
◆ すずめになつた 若者	96
◆ にぎりめしを とられた さむらい	100
◆ べつしより めれた さぶとん	104
◆ もう ひとりの ももたろうさん	110
◆ うめの みに なつた おばけ	114
◆ しあわせは ねて まて	120
◆ よめさんに なつた いちようの 木の 精	124
◆ おには外、ふくは内	130
◆ うさぎを 追つぱらつた きつね	132



ここから 出^でたい チンチロリン
 おばけとも 思^{おも}えない かわいい 声^{こえ}で
 す。おばあさんは こわいのも わすれて、
 おばけを はこから 出^だして やりました。
 すると おばけは、
 「げたを はきたい チンチロリン
 げたを はきたい チンチロリン」
 と 言^いいました。

「げたを はきたきや これでも はきな。」
 おばあさんは、おじいさんの 古^{ふる}げたを
 出^だして やりました。
 げ たを はいた おばけが、またも
 うたうように 言^いいました。
 「くわを 持^もちたい チンチロリン
 くわを 持^もちたい チンチロリン」
 「そんなら これを 持^もって いけ。」



とりでに 岸の ほうへ ながれて きて、
おばあさんの 前で 止まりました。

(ありがたや、ありがたや、きつと たか
らものが 入って いるに ちがいない。)

おばあさんは 大よろこびで はこを

ひろいあげ、やつと 家まで 運びました。

(さあて、何が 出て くるかな。)

どきどきしながら はこの ふたを 開

けたら、なんと 目が 一つに 口が 二

つの おばけが にゆうつと 顔を 出し

ました。

「ひえっー」

おばあさんは、あわてて ふたを する

と、物入れの 部屋に ほうりこみました。

ところが しばらく たつと、部屋の

なかから おばけが うたうように 言い

ました。

「ここから 出たい チンチロリン





いきました。

「何、大^{なに}ばん 小^おぼんだと。」

おばあさんが あなに とびこみ、つば
の ふたを とりました。

すると どうでしょう。なかには 金^{きん}ぴ
かの 大^おばん 小^こぼんが、ぎっしり つま
って いました。

おばあさんは、とびあがって よろこび、
おじいさんを よんで きました。おじい
さんも びっくりして、もう 少^{すこ}して こ
しを ぬかす ところでした。

村^{むら}一番^{いちばん}の お金^{かね}持ち^{もち}に なった おじい
さんと おばあさんは、死^しぬまで しあわ
せに くらしたそうです。(高知県の昔話)

おうちの方へ

おかしなお化けが、おばあさんにわけのわからない要
求を次々とくり返しながら、いったいなにをするのか、
聞き手の興味をひきつけておきながら最後に思わぬ幸運
をもたらす。その発端からラストまで、なんともにぎや
かでユーモラス。でも、こんなお化けならだれだって大
歓迎です。土に生きる人たちならではの幸運を願う昔話。

おばあさんは、古^{ふる}くなった くわを

出^だして やりました。

おばけは くわを かつぐと、

「^{はたけ}畑へ 行^いきたい チンチロリン

^{はたけ}畑へ 行^いきたい チンチロリン」

と 言^いいました。

「ほんとに おかしな おばけだよ。」

おばあさんは、おばけを うらの 畑^{はたけ}へ

つれて いきました。

おばけは 畑^{はたけ}に くと、かたから く

わを おろして 言^いいました。

「ここを ほりたい チンチロリン

ここを ほりたい チンチロリン」

「ほりたきや ほって みな。」

おばあさんが 言^いうと、おばけは よろ

こんで 畑^{はたけ}の 土^{つち}を ほりはじめました。

その 早^{はや}いこと、あつと いうまに、深^{ふか}い

あなを ほりあげました。



「こら、そんなに 深^{ふか}く ほっちゃ だめ
だ。」

おばあさんが 止^とめようと して、あな

を のぞいたら 大^{おお}きな つぼが 出^でて

きました。

「大^{おお}ばん 小^こばん どつきり

チンチロリン

大^{おお}ばん 小^こばん どつきり

チンチロリン」

おばけは そう 言^いうと、くわを おき、

げたを ぬいで 山^{やま}の ほうへ 歩^{ある}いて

と言つて、走つていきました。

し

よう屋さんというのは、村で一番えらい人です。

「たいへんだ。しょう屋さんがなくなつたぞ。」

村の人たちは、びっくりしてつぎつぎとしょう屋さんの家へかけつけました。

ところが、しょう屋さんは元気で庭の手入れをして、いるではあり

ませんか。

「しまった。また源さんにやられた。」

村の人たちは、はらが立つやらくやしいやら。それでも源さんのみごとなうそに、すっかりかんしんしてしまいました。

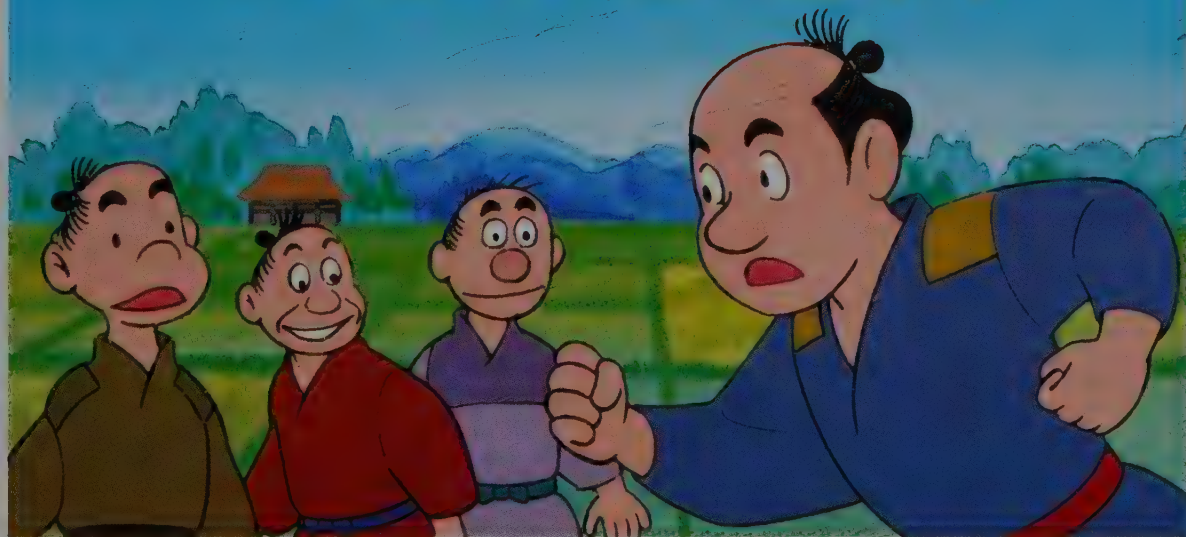
(岐阜県の昔話)

おうちの方へ

うそつきにはだまされまいと注意している人でも、やっぱり見事なうそにひっかけてしまう。さすがは名人だけのことはあります。昔は、どの村にも、とんち名人やうそつき名人がいて、その技をきそいあいました。だまされて怒るより、思わず感心してしまううそのすばらしさは、一服の清涼剤。うそつきは笑いの演出者です。



うそつき名人めいじん



む

かし、源げんさんといううそつき
の名人めいじんがいました。

ある日、村むらのたんぼ道みちを走はしつて
いるのを見て、村むらの人ひとたちが言いい
ました。

「そんなに急いそいで、どこへ行いく。ど
うだ、きょうもうそをついてみた
ら。」

でも、源げんさんは知しらん顔かおです。

「さすがのうそつき名人めいじんも、よほど
あわてているとみえて、うそをつ
くひまもないらしい。」

みんなが、どっとわらいました。す
ると源げんさんは、こわい顔かおで、

「何を言いうか。しょう屋やさんが死しん
だというのに、うそなんかついて
いられるか。これからとなり村むらへ知し
らせに行いくところだ。」

いた わらぞうりを ひろいました。

すると どうでしょう。わらぞうりは
ごちそうを 入れる じゅうばこに か
わりました。

じゅうばこを 持った むすめは、な
にくわぬ 顔で 村の ほうへ 歩いて
いきます。

若者が、こっそり あとを つけて
いくと、むすめは 長者さんの 家に
入りました。

そんな こととは 知らない 長者さ
ん。

「おう、よく きた。よく きた。」
と 言っ、むすめを むかえました。

「これは おみやげです。」
むすめは わらぞうりで できた ご
ちそうの じゅうばこを わたしました。

「それは それは、ごていねいに。」





あたま 頭を おどろ そられた 男

む

かし むかし、ある 村に、とても 気の強い 若者がいて、

「おれは きつねにだって、たぬきにだって、だまされたことが ない。」

と いばって いました。

ある 日、若者が 村はずれの 道を

歩いて いると、むこうから、一匹きの

きつねが やって きました。

(さては、人を だましに きたな。)

若者は、あわてて 草むらの なかに

かくれました。

きつねは、あたりを きよろきよろ

見て いましたが、その うちに、はっ

ぱを とりだし、頭への つけたかと

思うと、美しい むすめになりました。

(なるほど、たいした ものだ。)

若者が かんしんして いたら、むす

めに ばけた きつねは、道に 落ちて



「きつねだなんて あんまりです。」
 と 言^いって、たもとを 顔^{かお}に あて、
 しくしく なきだしました。

「わしの 家^{いえ}の よめになる むす
 めを きつねだなんて、もう ゆるさ
 ん。」

長者^{ちやうじや}さんは、刀^{かたな}を ぬき、若者^{わかもの}に
 切りつけようと しました。

「ま、まちなさい。」

そこへ、りっぱな おぼうさんが
 とびこんで きて、長者^{ちやうじや}さんの 手^てを
 おさえました。

「どんな ことが あつても、人^{ひと}を
 ころしては いけません。わけを 話^{はな}
 しなさい。」

そ^そこで、長者^{ちやうじや}さんは、これまでの
 ことを おぼうさんに 話^{はな}しま
 した。

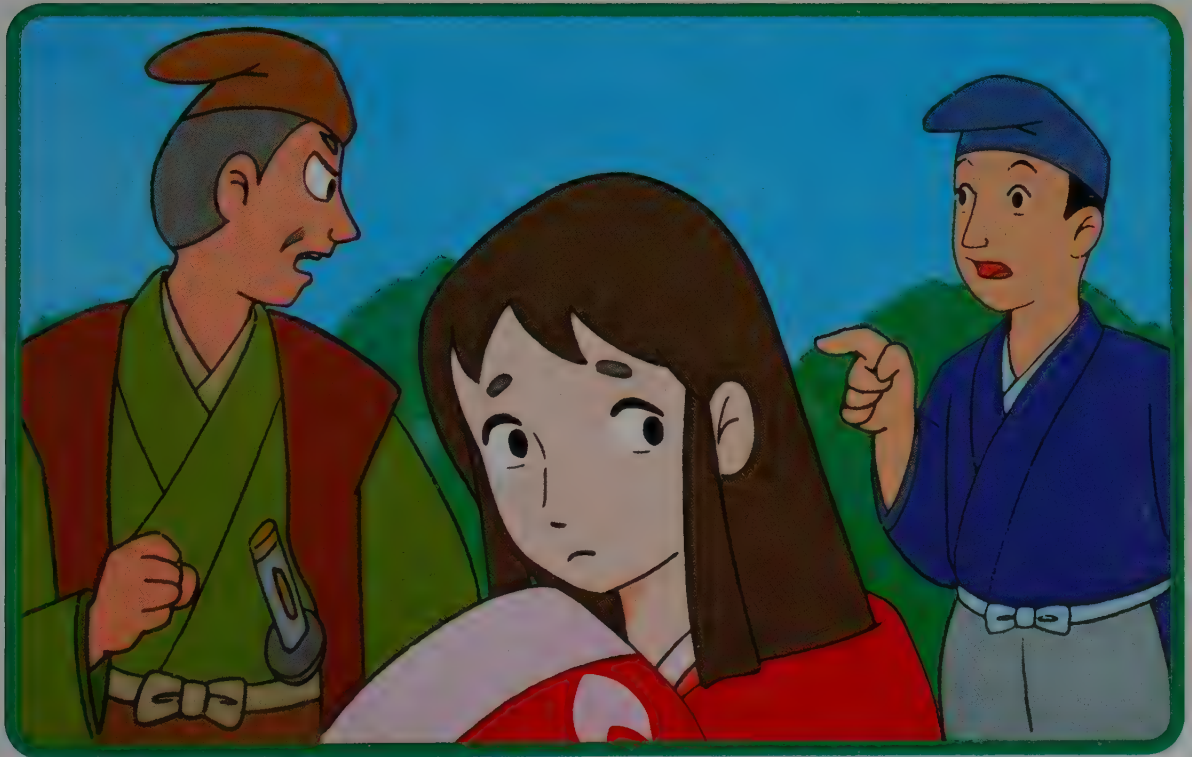
長者ちやうじやさんの おくさんも にこにこ
して、じゅうばこを 受けとりました。
家の 外そとから、この ようすを 見み
ていた 若者わかものは、とうとう がまん
できずに、家の なかへ とびこむな
り、

「みんな、だまされちゃ いかんぞ。
その むすめは きつねだ。」
と 言いいました。

「な、なんて ことを 言いう。これは
となり村むらの 長者ちやうじやの むすめさんで、
こんど わしの むすこの よめにな
る 人ひとだ。」

長者ちやうじやさんが おこつて 言いいました。
「いいや、そいつは、たしかに きつ
ねだ。むすめに ばける ところを
ちゃんと 見みた。」

すると、むすめは、



きつねが人をだます昔話は多くても、これほど見事にだましてしまう話は数多くありません。実に手がこんでいて、いったんは正体を見せておきながら、最後は若者の頭までもそってしまいたくみなテクニク。まさか長者さんやお坊さんまでがきつねだとは、だれも気づかないでしょう。まさにスリル満点の意外性を持つ笑い話。



りはじめました。

ところが、その いたいこと。そる

と いうより、まるで 毛を むしり

とるみたいです。あまりの いたさに

若者が 思わず、

「やめて くれ！」

と さげびました。

その とたん、目の 前の ものが

みんな 消え、若者は 草むらの な

かに すわって いました。

（おかしいなあ。ゆめでも 見たのか

な。）

そう 思っ、頭に 手を やった

ら、なんと 半分いじょうも 毛が

なくなっ、いましたとき。

長者さんも、おくさんも、おぼうさ

んも、みんな きつねだったのですね。

「なるほど わかりました。でも、この男を おとし ころしても しかたがない。ここは ひとつ、わしに まかせてください。」

そう 言う^いと、おぼうさんは 若者^{わかもの}を にらんで 言^いいました。

「ほんとうなら、ころされても しかたのない ところだ。でも、お前^{まえ}は

まだ わかい。一ど いちど 死^しんだ つもりで、きょうから わしの でしに なれ。」

若者^{わかもの}は、もう 少^{すこ}しで ころされる ところを たすけて もらったので、

おぼうさんの いう とおり、でしになる ことを しようちしました。

「よろしい。それじゃ、さっそく 頭^{あたま}を そって やろう。」

おぼうさんは、長者^{ちやうじや}さんの 家^{いえ}で かみそりを かり、若者^{わかもの}の 頭^{あたま}を そ





まず、四郎に たずねました。

「四郎や、りんごは どう した。」

すると 四郎は にっこりして、

「みんな 食べちゃった。おいしかった。」

と 言いました。

その 言い方が とても かわかった
ので、みんな どっと わらいました。

「では、太郎は どう した。」

「りんごの たねを とって、りんごの
木を つくるよ。」

「なるほど、お前は わしの あとを つ
いで、りっぱな お百しょうになれるぞ。」

お父さんは、よろこんで 太郎を ほめ
ました。

「次郎は、どう した。」

「友だちに 見せて、売って やったよ。
すごく もうかった。」

「なに、売って しまっただと。お前は

友だちに あげた りんご

むかし、あるところに 四人の男
の子を 持つ お百しょうさんが

いました。

一番上は 太郎、二番めは 次郎、三番めは 三郎、四番めは 四郎と いいま

した。ある時、お百しょうさんが 町へ 行

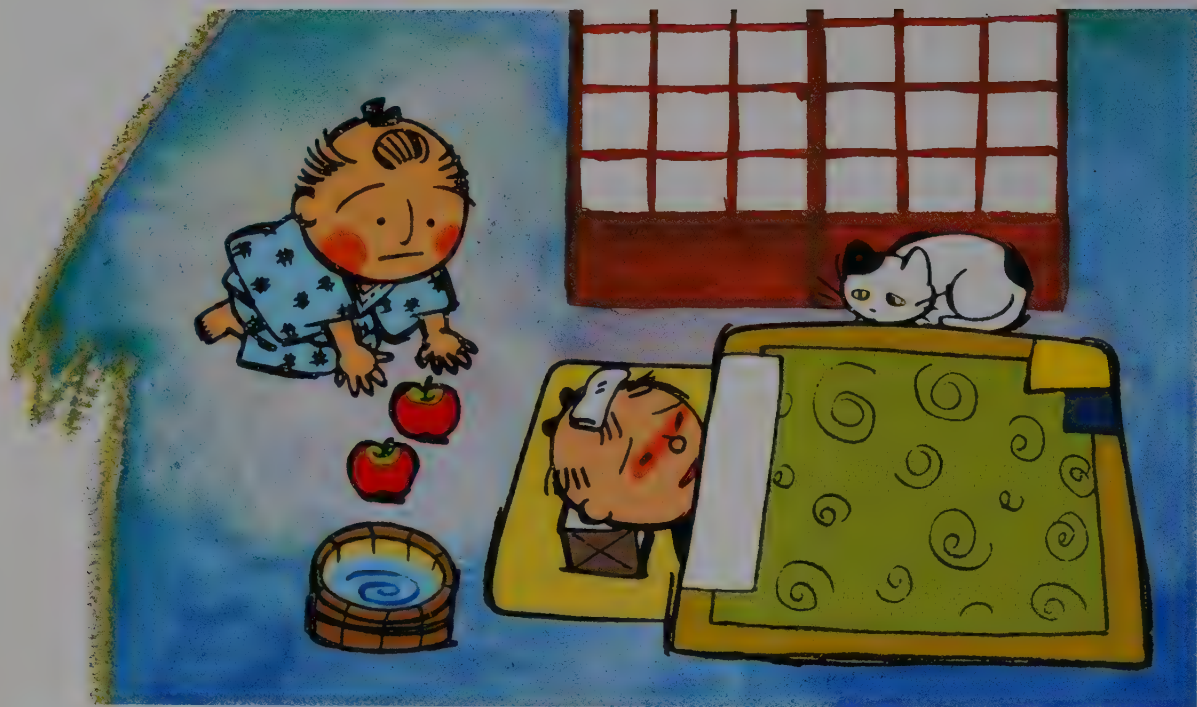
くと 大きな りんごを 売って いました。



とても めずらしかったので、子どもたちのおみやげに、七つ 買って 帰りました。

太郎と 次郎と 三郎は、二つずつ も らいました。四郎は まだ 小さいので、一つだけでした。

さて つぎの ばん、お百しょうさんは 子どもたちを 集めて、りんごの ことを 聞く ことに しました。



おうちの方へ

一種の教訓話ともいえそうな昔話ですが、お説教くさいところがまるでなく、やさしい心がかに大切かを、わかりやすく語りかけてくれます。とりわけ、三郎が百姓さんに問いつめられて、病気の友だちにあげてしまったと白状するところでは思わずほろりとさせられます。なんだか童話みたいな美に味わい深い昔話です。

(福岡県の昔話)

そうなる顔で言いました。

「友だちが病気でねていたので、持つていってあげたんだよ。でももつたいたないと食べてくれないので、まくらもとへおいてきた。」

「えらいぞ、三郎。」

お百しょうさんは思わず、三郎をだきよせ、頭をなでました。

それから、兄弟たちに向かって言いました。

「太郎もりっぱだが、みんな、三郎のようないやましい心をわすれてはいけないよ。」



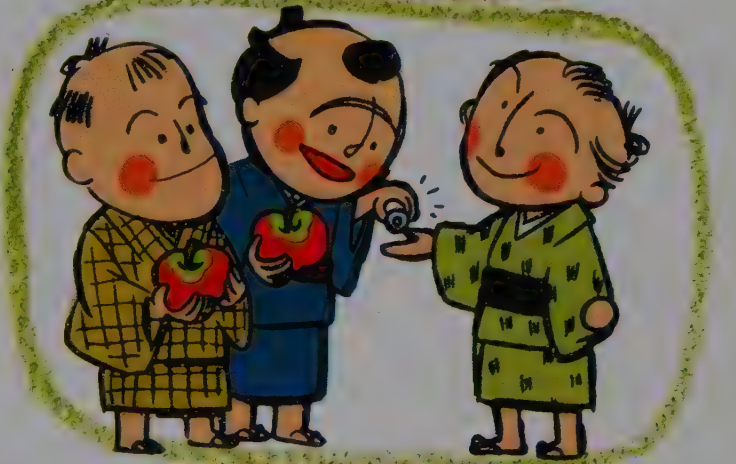
なんて よくばりだ。」

お百^{ひゃく}しようさんは、がっかりしました。

「ところで、三郎^{さぶろう}は どう した。」

でも、おとなしくて 気の 弱い 三郎^{さぶろう}

は 何も 言^いいません。



「みんな あげちゃった。」

と 言^いいました。

「なに、あげて しまった。せっかくお

みやげに 買^かって きて やったのに。だ

れに あげたんた。」



そ

れでも お百^{ひゃく}しようさんが なんと
も たずねるので、

お百^{ひゃく}しようさんが 大き^{おお}な 声^{こえ}を 出^だし
ました。すると 三郎^{さぶろう}は いいよ なき



の 絵^えかきも かなわない ほどでした。

ある 時^{とき}、子^こどもは 何^{なに}を 思^{おも}ったのか、
「おら、ねこの 絵^えを かきながら、旅^{たび}を
して くる。」

と 言^いって、絵^えの具^ぐばこを かついで 家^{いえ}
を 出^でて いきました。

子^こどもは お金^{かね}が なくなると、ねこの
絵^えを かいて 売^うり、それで ごはんを
食^たべたり、やど屋^やに とまったり しまし
た。

ところが、ある 日^ひ、さびしい 村^{むら}はず
れまで きた 時^{とき}、日^ひが くれて しまい
ました。

(弱^{よわ}ったな。どつかに とまる ところは
ないかな。)

と 思^{おも}いながら 歩^{ある}いて いたら、古^{ふる}い
お寺^{てら}が ありました。まるで おばけ屋^やし
きみたいにあれた お寺^{てら}で だれも 住^す

ばけものを たいじした ねこ

む

かし、あるところに、ねこの絵えをかくのがとてもじょうずな

子どもがいました。ねむっているね

こ、走はしっているねこ、どのねこの

絵えも、まるで本ほんものそっくりで大人おとな



の 絵^えを はり、その まま よこにな
って ねむりこんで しまいました。

す

ると、真夜中^{まよなか}ごろ、まるで 犬^{いぬ}のよ
うに 大きな ねずみが 出^でて き
て、子どもに かみつこうと しました。

その とたん、お堂^{どう}の かべ中^{うち}に はら
れた 絵^えの なから ねこが つぎつぎ
と とびだしました。

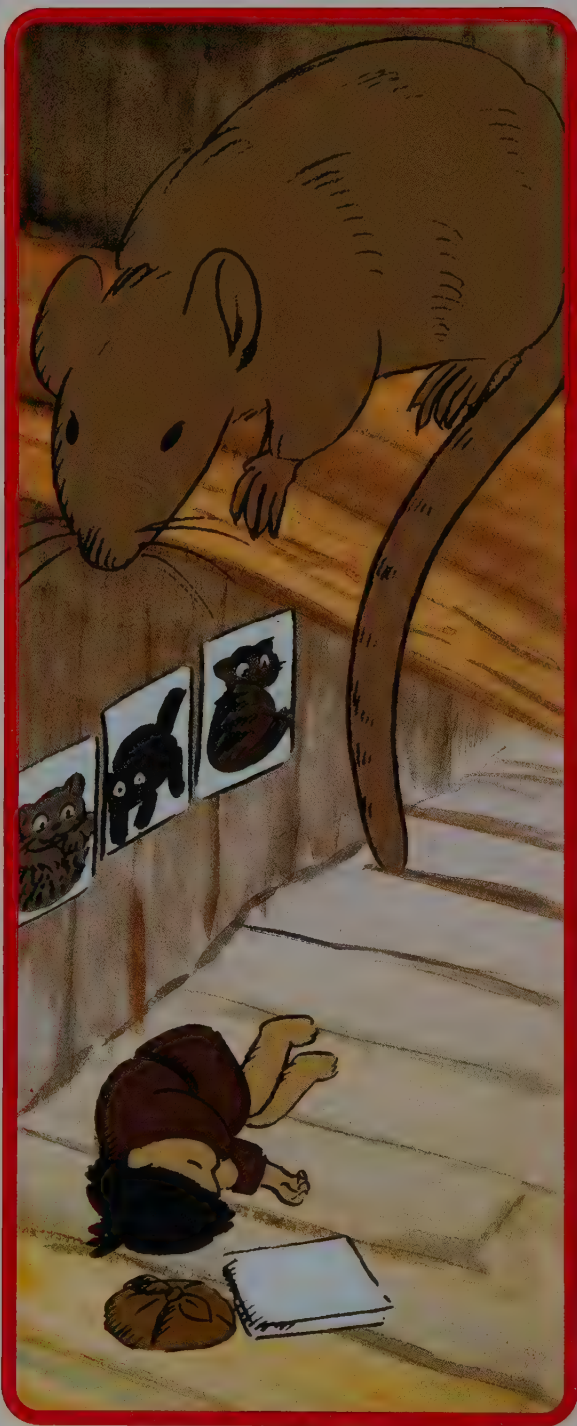
「にやおう！」

一匹^{いっぴき}の ねこが とびかかると、ほか
の ねこも いっせいに とびかかり、大^{おお}
きな ねずみに かみつきました。

でも、さすがは 人食^{ひとく}いねずみ。くるり
と 体^{たい}を かわすと、ねこに 向^むかって
てつのような きばを むきました。

「にやご、にやご、ぎやおう。」

すごい 声^{こえ}と いっしょに、ねこと ね
ずみが お堂^{どう}の なかを かけまわります。



んで いません。

(しかたがない。今夜は ここで とまろう。)

子どもは、ゆか板の あちこちが 落ちた、ほこりだらけのお堂に こしをおろしました。

むかしは りっぱな お寺だったのに、
どうして こんな お寺に なって しまったのでしょうか。

その わけは、おしょうさんが なくなつた後、おそろしい ばけものが 住むように なり、お寺に とまった 者は だれでも 食べられて しまうという わさが たつたからです。 ほんとうに、
これまで 一人として たすかった 者は ありませんでした。

そんな ことは 知らない 子どもは、
お堂の かべ中に 自分の かいた ねこ





子どもが ほっと して あたりを見
たら、かべに はった ねこたちが いっ
せいに、

「にやおうん。」

と 鳴きました。よく 見ると、どの ね
この 体にも ひっかききずのような あ
とが、いくすじも ついて いました。

「ありがとうございます。」

子どもは、ねこの 絵を はずして ふ
ところに 入れると、絵の 具ばこを かっ
いで お寺を 出て いきました。

そんな ことが あってから、この お
寺には 二どと ばけものが 出な くな
ったそうです。

(富山県の昔話)

おうちのちへ

絵にかかれた猫たちが、化け物寺の大ねずみを退治し
てしまふ。しかも、その絵をかくのが子どもというので
すから、聞き手は目を輝かさずにはいられませんが、自分
もそんな絵をかくことができたらずと主人公がうらやまし
くなります。すぐれた絵は生命までも持つ、そんな画聖
にまつわるエピソードが昔話化したものでしょう。

子どもがびっくりして 目を さます
と、どうでしょう。何びきもの ねこが、
犬みたいな ねずみと はげしく たたか
つて います。子どもは もう こわくて
こわくて、足が 動かず、にげる ことも
できません。

その うちに、

「ぎゃおう」

という 大きな 鳴き声と ともに ね
ずみが たおれました。子どもは びっく
りして、その まま、気を うしなつて
しまいました。

つぎの 朝、子どもが 目を さました
ら、目の 前に 犬のように 大きな ね
ずみが 血まみれに なつて 死んで い
ました。

（おらを たすけて くれた ねこは ど
こへ 行ったのかな。）



いました。

「さあ、どっちが じょうずか、くらべて
みないと わかんないわ。」

それを 聞いた とたん、ごんべえが
はらを 立てました。

「そんなら 二人で、どっちが じょうず
か ばけくらべを しよう。」

「いいわよ。明日の ばん、おみやさんの
けいだいへ きて ちょうだい。」

お花は それだけ 言うと、さよならも
しないで 帰って いきました。

(なんて なまいきな きつねだ。見て
いろ。かならず 負かして やる。)

ごんべえは、どんな ものに ばけたら
お花を やつつけられるか いっしょうけ
んめい 考えました。

なにしろ お花の はなよめすがたと
きたら ほれほれするぐらい きれいで、





お花と「ごんべえ」

む

かし むかし、ある 村に お花と
いう きつねと、ごんべえと いう
たぬきが いました。二人とも ばけるの
が とても じょうずで、

「ごんべえなんかに 負けないわ。」

「ふん、お花なんかに 負けるもんか。」

と じまんしあつて いました。

ある 日、お花と ごんべえが 道で

ばったり 会いました。ごんべえは わざ
と ていねいに 言いました。

「お花さんは ばけるのが とても じょうず
だそうだけど、おいらと どっちが
じょうずかな。」

すると お花は つんと すまして 言

お花は、本ものの およめさんみたいに
うつむきながら おみやさんへ 行きました。
た。

ところが、とりいを くぐろうと して
ふと 下を見ると、ほかほか ゆげの
たつて いる まんじゅうが 落ちて い
ました。お花は 思わず ごくんと つば
を 飲みました。どうやら ごんべえは
まだ きて いない ようです。

(今のうちだわ。)

お花は 急いで まんじゅうを ひろつ
て 口の なかへ 入れようと しました。
その とたん、まんじゅうが ぱつと た
ぬきに かわりました。

「なんだ、なんだ。いくら 美しい はな
よめに ばけても、くいしんぼうの きつ
ねか。」

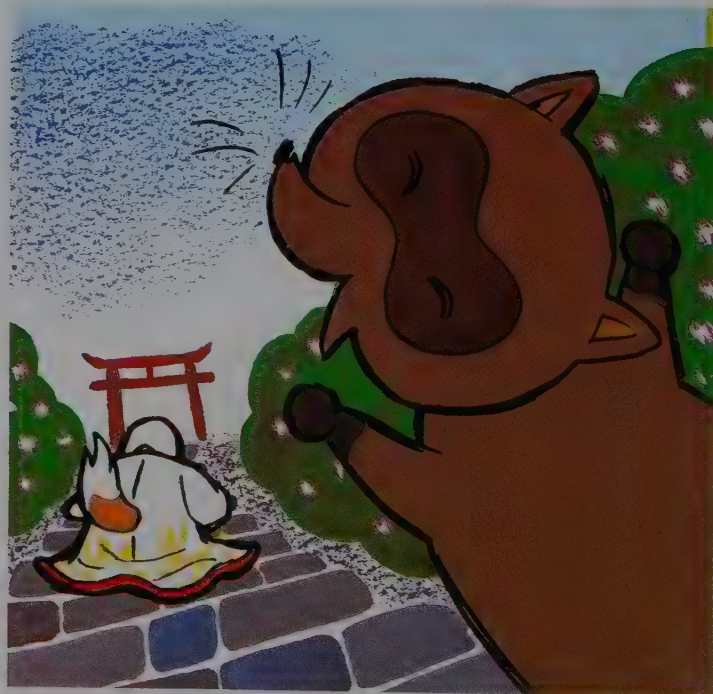
はずかしく なった お花は、はなよめ

おうちの方へ

どんなにすてきな花嫁姿に化けていても、まんじゅう
の誘惑には勝てず、つい正体を見せてしまふ。ほほえま
しくもユーモラスな昔話です。きつねが、しばしば人間
の女に化けるのは、その形からの発想で、障子にうつる
影は、女の人があなだれているように見えたからです。
たぬきはまるいので、茶がまやまんじゅうがびつたり。

すがたに ばけて いるのも わすれて、
しつぽを 出し出し にげて いきました。

(福島県の昔話)





つい 人間の むすめさんと まちがえて
 しまいます。それに、ばけるのが じょう
 ずな ごんべえでも、はなよめすがたにだ
 けは ばける ことができません。

さて、きつねの お花。

「どうせ わたしに 勝てっこないのに。
 もう 二どと ばけくらべしようとなんか
 言い出せないように して やるわ。」

と 言っ、なんども なんども はなよ
 めすがたに ばける れんしゅうを しま
 した。

い よいよ ばけくらべの 夜が きま
 した。

お花は さつと はなよめすがたに ば
 けました。れんしゅうを しただけあつて、
 これまで いじょうに 美しい はなよめ
 すがたに なりました。とても きつねが
 ばけて いるとは思えない ほどです。

いろ 色の 鳥^{とり}が おじいさんの そばに きて
言^いいました。

「どうして わたしを うたないのですか。
鳥^{とり}を うたなくては くらして いけない
でしょう。」

「いいや、わしは ばあさんと 二人^{ふたり}ぐら
し。お前^{まえ} 一わ^{いち}を うたなくても、なんと



か くらして いける。お前^{まえ}みたい な 美^{つく}
しい 鳥^{とり}を うつなんて、わしには でき
ないよ。」

おじいさんが 言^いいました。

「そんなら 二人^{ふたり}が らくに くらして
いけるように して あげますから、鳥^{とり}や
けものを とるのは やめて ください。」

言^いったかと 思^{おも}うと、金^{きん}色^{いろ}の 鳥^{とり}は ま
っすぐ おじいさんの 家^{いえ}の ほうへ と
んで いきました。

(やっぱり 神^{かみ}様^{さま}の 鳥^{とり}かも しれないぞ。)

おじいさんが ふしぎに 思^{おも}いながら、
家^{いえ}に 帰^{かえ}って みると どうでしょう。今^{いま}
まで 住^すんで いた ぼろ小^こ屋^やが、りっぱ
な 屋^やしきにかわって いました。

「こりや たまげた。」

おじいさんが びっくりして いたら、
なかから おばあさんが 出^でて きました。



とりに 鳥になつた おばあさん



む

かし、てつぽううちのおじいさんがいて、毎日山へ行つては

鳥やけものをとっていました。

ある日、いつものように山へ出かけると、今まで見たこともない美

しい金色の鳥がとんできました。

(なんて美しい鳥だ。もしかして神様の鳥かもしれないぞ。)

おじいさんは、てつぽうでうつのをやめて見とれていました。すると金

いちどでいいから空をとべるよう金色の鳥にたのんできてくれませんか。

おばあさんがあんまりうるさく言

うので、おじいさんは山へ出かけて

いって、金色の鳥に言いました。

「すまないが、おばあさんのねがいを

かなえてあげておくれ。」

「しやうちしました。すぐとべるように

してあげましょう。」



おじいさんがほっとして家にもど

るとどうでしょう。おばあさんは、一わ

の鳥になつて、屋根の上に止まっ

ているではありませんか。すると鳥

になつたおばあさんが言いました。

「空をとびたいと言つても鳥にな

るなんて。早く人間にもどしてくだ

さい。」

でも、おばあさんはそれっきり二ど

と人間にもどれませんでした。気のど

くに、おじいさんは鳥になつたおば

あさんをかわいがりながら、一人でく

らすようになつたそうです。

(沖縄県の昔話)

おうちの方へ

人は幸せな生活を望みながら、いざ幸せな生活ができるようになる、更にその上の望みをほしが。そんな人の弱さをいましめる昔話です。と同時に生きものへの思いやりをこめながら、不思議で、ロマンチックなイメー

ージをどこまでも広げてくれます。有名なソビエトの昔話「金の魚」を思わせる金色の鳥というのもおもしろい。

「りっぱな 身^みなりの 人^{ひと}が やって き
て、あつと いうまに 屋^やしきを たて、
米^{こめ}を どつきり 運^{はこ}んで くれて…。もう
何が 何^{なに}やら…。」

そこで、おじいさんは 山^{やま}で 会^あった
金^{きん}色^{いろ}の 鳥^{とり}の こと^{こと}を 話^{はな}して あげまし
た。

「そうですか。すると これは 山^{やま}の 神^{かみ}
様^{さま}の おめぐみかも しれません。もう
鳥^{とり}や けものを うつのは やめて くだ
さい。」

「ああ、もう てっぼううちは やめた。

これからは 二^{ふたり}人で のんびりくらそう。
おじいさんは その 時^{とき}から てっぼう
うちを やめ、おばあさんと 二^{ふたり}人で し
ずかに くらしました。仕事^{しごと}を しなくて
も 米^{こめ}は どつきり あり、食^たべるのに
ちつとも こまりません。



と ころが その うち^{うち}に、この くら
しに あきて きた おばあさんが
言^いいました。

「ああ、たいくつで 死^しにそうだ。鳥^{とり}みた
いに 空^{そら}を とぶ ことが できたら、ど
んなに 楽^{たの}しいでしょうね。おじいさん、



うさぎがだまって 通りすぎようと
すると、おおかみは しつつく さそい
ました。

「川^{かわ}むこうの 森^{もり}に、すてきな 花^{はな}が さ
いて いるんだ。とりに 行^いこうよ。」

うさぎは、しかたなく おおかみに つ
いて いく ことに しました。

おおかみは、さっそく かれえだを一^{いっ}
本^{ほん} ひろって きて、川^{かわ}の 上^{うえ}に かけま

した。

「うさぎどんから 先^{さき}に わたりな。」

「だって、何^{なん}だか おれそうだよ。」

「だいじょうぶ、ぼくだって 平^{へい}気^き なん
だから。」

うさぎは、こわごわ かれ木^きの 橋^{はし}を
わたりはじめました。

ところが、橋^{はし}の とちゅうまで 行^いった
ら、ぽきり。

だまされた おおかみ

む

かし むかし、ある ところに、と
ても いじわるな おおかみが い

ました。

(だれか いじめる やつは いないかな

あ。)

川^{かわ}の そばを ぶらぶら 歩^{ある}いて いた

ら、むこうから うさぎが やって きま
した。

「やあ、うさぎどん。おらと いっしょに、
遊^{あそ}ばない。」





「ま、まさか ゆうれい…。」

すると、うさぎが 言いました。

「何を ねぼけて いるんだい。おおかみ
どんの おかげで、りゅうぐうまで 行っ
て きたよ。」

「何、りゅうぐうだって。」

おおかみが 身を のりだしました。

「あれから 川を どんどん ながれて
いって、海へ ついたら、かめさんが や
って きて、りゅうぐうへ 案内して く
れたんだ。おとひめさまと いっしょに
ごちそうを 食べ、魚たちのおどりも
見せて もらった。そりや、もう 楽し
く 楽しくて。」

それを 聞くと、おおかみが 待ちきれ
ずに 言いました。

「おらも、行きたい。」

「だから、こう やって 知らせに きた



うさぎは あつと いうまに、川^{かわ}に 落^おちて しまいました。

「た、たすけて…。」

うさぎは もがきながら、どんどん な がされて いきます。

「ふん、ざまあ みろ。」

おおかみは、うさぎを 見^みて、手^てを た たきました。

でも、川^{かわ}下へ ながされた うさぎは、

うまいぐあいに 岩^{いわ}に つかまり、やつとこ

川^{かわ}から はいあがる ことが できました。

(ようし、今^{いま}に 見^みて いろ。)

うさぎは おおかみに 見^みつからないよ

う、こっそり 家^{いえ}へ 帰^{かえ}りました。

さ

て、つぎの 日^ひ。おおかみが 朝^{あさ}ね ぼうを していたら、

「おおかみどん、おおかみどん。」

と、戸^とを たたく 者^{もの}が あります。

「うるさいなあ、だれたよ。」

おおかみが 戸^とを 開^あけたら、なんと

うさぎが 立^たって いるでは ありません か。

「う、う、うさぎどん。」

おおかみは びっくりしました。

きのう、たしかに 川^{かわ}で おぼれ 死^しんだはずです。



ふくろが しずみはじめました。

「く、く、苦しい。だれか…。」

おおかみは、ふくろの なかで あばれ

まわりましたが、どう する ことも でき

ません。

(しまった、うさぎに だまされた。)

と思^{おも}った 時^{とき}には、もう あとの まつり。

その まま 川^{かわ}に しずんで ニどと う

きあがる ことが できませんでした。

(京都府の昔話)

おうちの方へ

力の弱いうさぎが、とんちでおおかみへの仇討ちをする。その痛快なやり方が聞き手の溜飲をさげるといわけです。それにしてもおおかみはいつだって悪役。というのも、外形からのイメージによるもので、昔は神様のお使いでもあったのです。だから「おおかみの眉毛」という、それでよい人間かどうかを見分ける話もあります。

んじゃ ないか。」

「ありがとう。でも、おら およげないよ。」

「だいじょうぶ、この ふくろに はい 入って

ながれて いけば、ひとりてに うみ 海へ 出
られるさ。」

「なるほど、そいつは ありがたい。」

う

さぎは、おおかみを つれて かわ 川の
そばへ 行きました。

それから、大きな おお ふくろの くち 口を 開
けて、おおかみを なかに 入れました。

「ほら ほら、まだ しつぽが で 出て い
る。もつと おくへ、もぐった もぐった。」

おおかみは、ふくろの くち おくへ もぐつ
て、からだ 体を まるくしました。

「そんなら、ふくろの くち 口を とじるよ。」

うさぎは、ひもで しつかり くち 口を と
じました。

「苦しくて、いき 息が できないよ。」



おおかみが、ふくろの なかから 言
いました。

「なに すぐに らくになるから。おと
ひめさまに あ 会ったら、よろしくね。」

うさぎは、ちから 力いっぱい ふくろを おし
ました。

ふくろは ごろんと ころがり、かわ 川の
なかへ どつぷん。ぷかり ぷかりと な
がれて いきました。

その うちに みず 水が しみこんで きて、



「いくら まんじゅうずきでも、病氣^{びやうき}じゃ
いくつも 食べ^たきれまい。つぎの 日^ひに、
もう 一^{いち}ど 行^いって、みんなで 食べる^たの
を 手^て伝^{つた}って やろう。」

そこで、一人^{ひとり}が まんじゅうを 持^もって
お見^みまいに 行^いき、つぎの 日^ひ、みんな

そろって もう 一^{いち}ど お見^みまいに 行^いき
ました。

ところが、あんなに たくさん あった
まんじゅうが、たった 一^{いっ}こしか のこっ
て いません。みんなは びっくりして
たずねました。

「お前^{まえ}、きのうの まんじゅう、みんな
食べたのか。」

すると 男^{おとこ}は、よわよわしい 声^{こえ}で 言^い
いました。

「みんな 食べ^たられる くらいなら、こう
して ねてなんか いるものか。あとの
一^{ひと}つが どう しても 食べ^たられない。」

(大分県の昔話)

おうちの方へ

落語の「まんじゅうこわい」に似た笑い話。それにしてもまんじゅうが食べたいばかりにわざと病氣になつて友だちからまんじゅうをせしめるとんちのたくみさ、みんなの思わくをはずして、たった一つだけ残したまんじゅうを前にしての見事なセリフ。短い話でありながら、笑いのパンチは強烈で、思わず吹き出してしまいます。

ひとつだけのこと まんじゅう

む

かし、とても まんじゅうの すきな 男が いました。

この男が、一どに 思いきり たくさん いる うちに、病気に なって ねこんで しまいました。

「かわいそうに。ひとつ、まんじゅうでも 持って お見まいに 行って やろうじゃないか。」

友だちが そうだんして、たくさんの



まんじゅうを 買って きました。でも、これを みんな お見まいに 持つていくのは、おもしろいような 気が します。すると 一人が 言いました。

出てきて、

「やい、その男、金を持っている

か。持っているなら ぜんぶ おいて

いけ。」

と 言いました。

「金なら どつさり 持っているが、お

前なんぞに わたす 金はない。」

「なに わたさないだと。そんなら いの

ちを もらおう。」

言うなり、追いはぎは 刀を ぶりあげ、

若者に 切りつけました。

その とたん、若者は ひらりと 体を

かわし、持っていた ふえて 追いはぎ

の 手首を 力いっぱい 打ちました。

その 力の 強いこと、追いはぎは 思

わず 刀を 落としました。若者は、その

刀を ひろい あげるなり、さっと よこ

にはらいました。



あーこと
かかとの
つけがえ

と

んと むかし ある 町はずれに
川が あって、りっぱな 橋が

かかって いました。

ところが 夜に になると 追いはぎが
出ると いうので、だれも 通る 人が
なくなりました。追いはぎと いうのは
ごうとうの ことです。



さて、その うわさを 聞いた 一人の
若者が、

「よし、わしが たいじして やる。」

と 言って、ある 月夜の ばんに 出か
けて いきました。

若者が ふえを ふきながら 橋を 通
りかかると、刀を ぬいた 追いはぎが



「ははは、はやく しろ。」

追いはぎは いたいやら くやしいやら
いらいらして となりました。

「はい ただいま。」

お医者さんも すっかり あわてて し
まい、あごの ところに かかとを くつ
つけ、足の ところに あごを くつつけ
て しまいました。

でも 手じゆつの じょうずな お医者
さんなので 何日も しない うちに、追

いはぎの きずは すっかり なおって
しまいました。

ところが こまった ことに 追いはぎ
のかかとは まつくろな ひげが は
え、あごの ところが ひびわれ、しもや
けに なって しまいました。

さすがの 追いはぎも これには 弱つ
て しまい、

(もう 追いはぎなんか しない。
と、心を 入れかえました。

そんな ことが あつてから、橋の上
は、夜に なつても 安心して 通れるよ
うに なったそうです。

(青森県の昔話)

おうちの方へ

かかとからひげがはえ、あごがしもやけになってしま
う。考えただけでもおかしくなってくるナンセンシカル
な笑い話です。といつても、そんなことになったのは自
業自得、いまさら追いはぎをしないと反省してもあとの
祭り。悪事をいましめながら、こんな愉快な話をつくり
あげる昔の人たちの空想力におどろいてしまいます。

追いはぎが びっくりして 首を ひつこめた とたん、あごを 切り落とされた。

「あわわわ…」

追いはぎが あわてて にげようとしたら、こんどは かかとを 切り落とされました。

それでも ひっしになって かけだし、やつとの ことで 町の なかの かくれ家に たどりつきました。でも この ままでは ごはんも 食えなければ、きちんと 歩く ことも できなくなってしまう。

そ

こで お医者さんの ところへ かけこみ、

「わわわしは、おおお、追いはぎだ。橋の上に あごと かかとを 落として きたから、ひろって きて くつつけろ。」



と、言いました。

あごを 切られて うまく しゃべれなくても、なにしろ あいては おそろしい追いはぎです。もし ことわったら どんな 目に あわされるか わかりません。そこで お医者さんは、家の 者に たのんで 橋の上から 切り落とされたあごと かかとを ひろって こさせました。

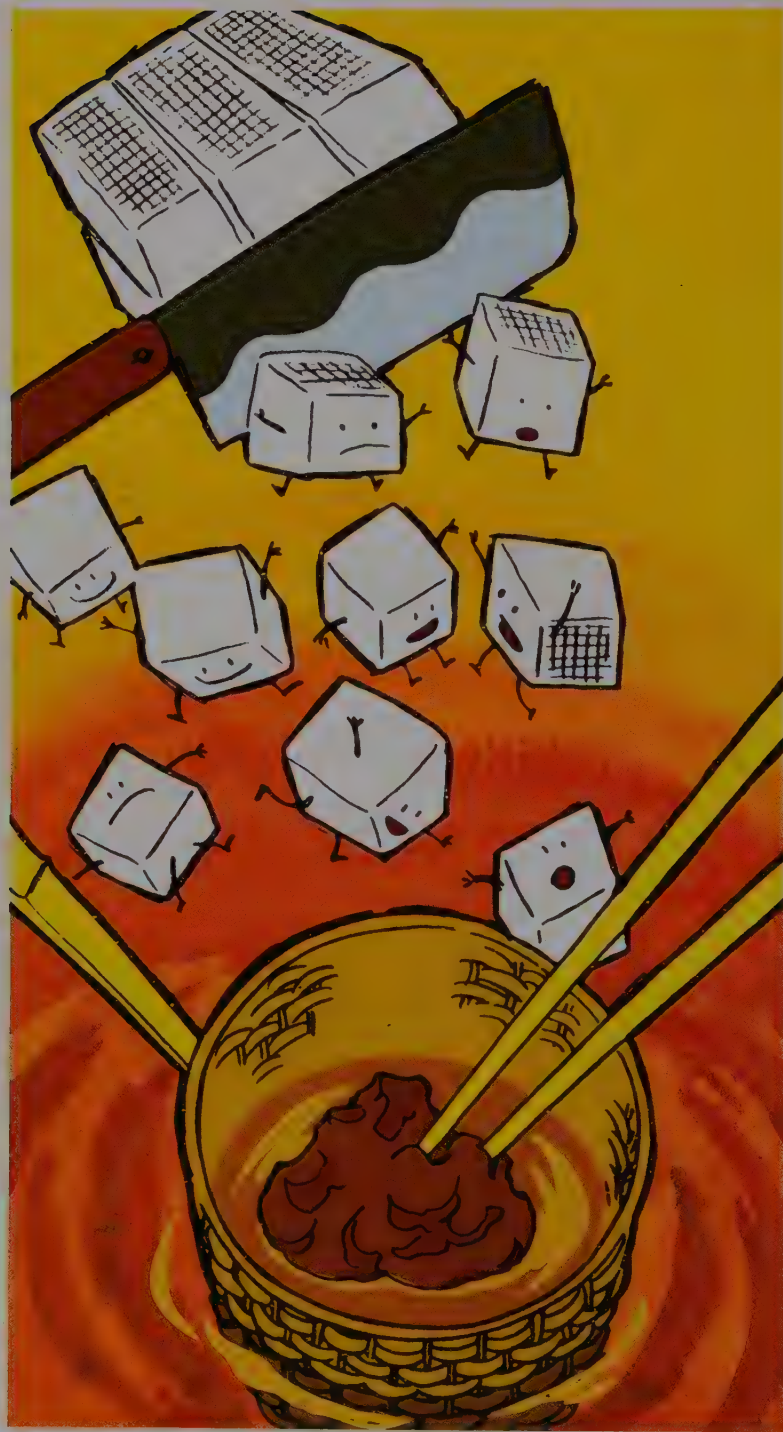
たしは いっしょに なる ものによつ
て いくらでも おいしい あじに なれ
るさ。お前は まえ いつだって くさい おみ
その あじ。」

「なんだと。えらそうな ことを い言っ
て、お前は まえ ほうちようで 切_きられたり、

おはして くずされたら おしまいじゃ
ないか。」

「ふん、体_{からだ}が くずれたって、おみそみた
いに とけは しないからね。どんなに
小_{ちひ}さく なつても、とうふは とうふ。」

「もう かんべん できない。」



とうふとおみそ けんか



と

うふと こんにちはを おみそで
にたら、とつても おいしい 料理
ができます。

でも、ずっと むかし、とうふと おみ
そは けんかばかり して いたそうです。

ある 時、とうふが おみそに 言いま
した。

「お前は いつも 黒い 色を して い
て、ふたを とつたら へんな におい。

わたしの 白い 体まで よごれて くさ
くなる。」

すると、おみそが おこつて 言いまし
た。

「なにが くさいものか。人間は この
においが だいすきで、毎日 みそしるに

して 飲むじや ないか。いくら 色が
白くても お前には あじがない。」

「あじが ないだって、とんでもない。わ

おうちの方へ

身近な料理を使つてのユーモラスな昔話だけに、子どもたちをよろこばせずにはおきません。しかも、豆腐もおみそもとは大豆という知識まで教えてくれます。一見たわいのない話に見えながら、あったかくて、うまそうな料理が目につかび、みんな仲よくのテーマがおのずと心に残ります。料理上手なお母さんが生んだ昔話です。



ちだ。」

そう 言^いつて こんにやくは ぷるぷる

つと 体^{からだ}を ふるわせました。

す

ると おみそが 言^いいました。

「そうだ。こんにやくの いうと
おりだ。親^{しん}せきどうしは なかよく しな
くちや。」

つづいて とうふが 言^いいました。

「ほんとうだとも。へんな ことを 言^いつ
て ごめんね。これからは こんにやくも

ぼくらの なかまに しようよ。」

そこで、とうふと おみそと こんにゃ

くは いっしょに なつて おいしい 料^{りょう}

理^りに なつたそうです。

寒^{さむ}い 日^ひに おみそで にた とうふと

こんにやくを 食^たべると 心^{こころ}の なかまで

ほかほか あたたかくなります。

(広島県の昔話)

おみそは くやしく なって、とうふに
とびかかろうと しました。

「ま

った、まった。」

そこへ、こんにやくが とびだし
ました。

「つまらん ことで けんかをするんじ
や ないよ。この わしを 見て みろ。

色は 黒いし、体は 切られるし、おまけ
に あじも ない。それでも じつと が
まんして いるんだぞ。」

「なるほど。」

とうふと おみそは つくづくと こん
にやくの 体を 見ました。

「それに よく 考えて みろ。お前たち
は もともと だいずから できて いて
親せきどうしじゃ ないか。親せきどうし
で けんかをするなんて とんでもない。
おれなんか 親せきも なくて 一人ぽつ



るのを 今^{いま}か 今^{いま}かと 待^まって いました。
 やがて、おぼうさんが 出^でて きて 台^{だい}
 の 上^{うえ}に あがり、ほとけさまの お話^{はなし}を
 始めました。何^{なん}とも ありがたい お話^{はなし}で、
 おぼうさんが 一^{ひと}言^ご 言^いう たびに、みん
 な、
 「へへへえ…。」

と 頭^{あたま}を さげました。
 ところが ふしぎな こと、みんなが
 頭^{あたま}を さげて いる 間^{あいだ}、おぼうさんの
 耳^{みみ}が ペラペラッ、ペラペラッ と 動^{うご}きま
 す。
 ちょうど そこへ、村^{むら}の やど屋^やに と
 まって いる りょうしが、





おぼうさんに ばけた古だぬき

む

かし、いなかの お寺てらに 一人ひとりの
おぼうさんが やって きました。

都みやこから おいでに なった りっぱな お
ぼうさんと いうので、その 夜よる、村中むらじゅう
の 人ひとたちが 集あつまりました。

「きつと、ありがたい お話はなしを 聞きかせて
くださるに ちがいない。」

「おとなしく 聞きかなくちや、ばちが あ
たるぞ。」

村人むらびとたちは、お堂どうの なかに ぎょうぎ
よく すわって、おぼうさんの 出でて く

ズドン。

と うちました。

その とたん、おぼうさんは 台の上から ころがりおちました。

「だれだ、てつぼうを うったのは。」

村の人たちが いっせいに 立ちあが

りました。もう お堂の なかは たいへ

んな さわぎです。



「何て ことを するのだ。お前、頭でも

おかしく なったのか。」

「おぼうさんを うつなんて、もう ゆる

さん。」

みんなは いっせいに りょうしをと

りかこみました。

「ま、待て。」

りょうしが 言いました。

「あいつは おぼうさんなんかじゃ ない。

人を だまして 食いころす おそろしい

古だぬきだ。うそだと 思うなら、よく

見て みろ。」

村の人たちは、いっせいに 台の そ

ばへ かけよりました。気のどくに むね

を うたれた おぼうさんが、あおむけに

なって たおれて います。

「何が 古だぬきだ。まちがいなく りつ

ばな おぼうさんだ。」

(どんな りっぱな おぼうさんだろう。)
と 思^{おも}って、お寺^{てら}へ やって きました。

りようしは、しょうじに 指^{ゆび}で あなを
あけ、そつと お堂^{どう}の なかを のぞきま
した。ところが、みんなが 頭^{あたま}を さげる
たびに、おぼうさんの 耳^{みみ}が ペラペラッ、
ペラペラッ と 動^{うご}きます。

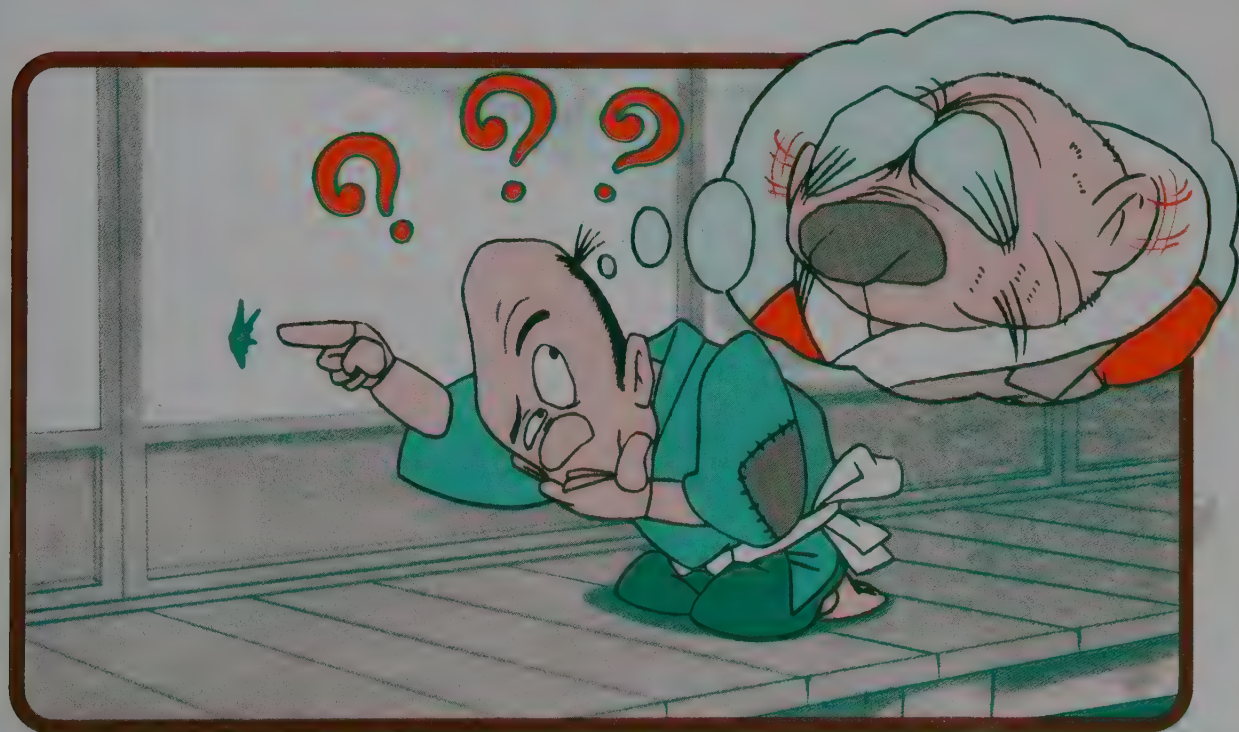
(おかしいぞ。)

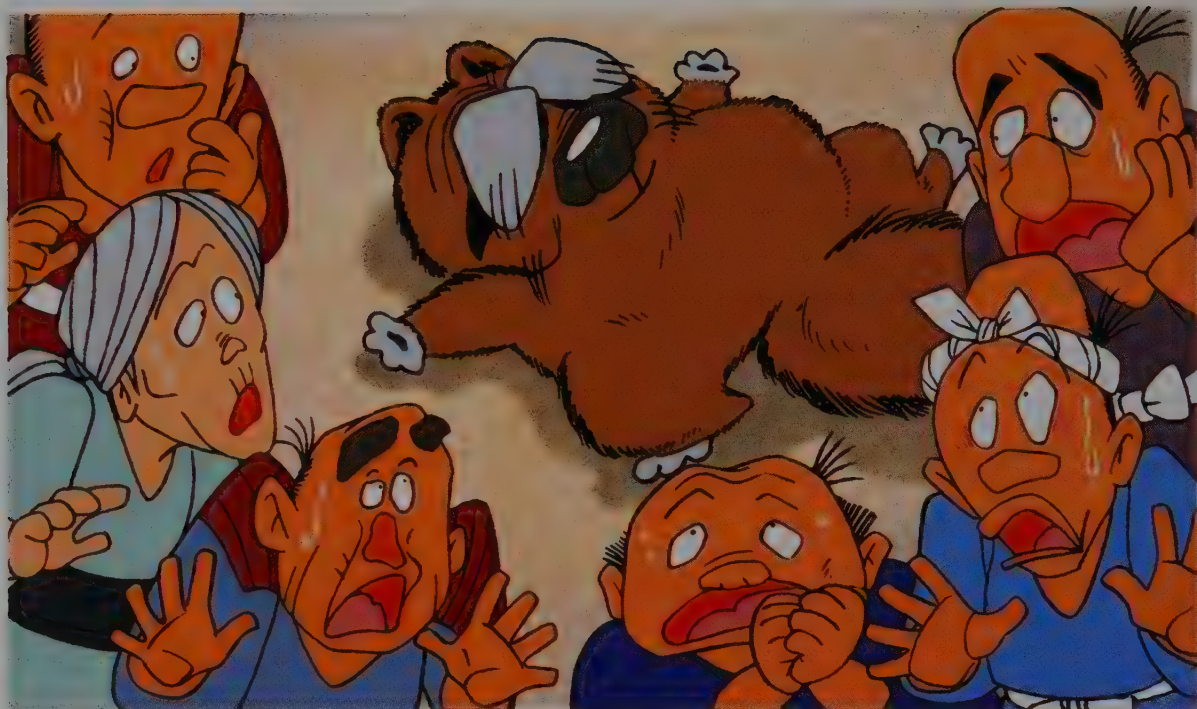
りようしは、もう 一^{いち}ど よく 注^{ちゅう}意^いし
て おぼうさんの 耳^{みみ}と 顔^{かお}を 見^みました。
ときどき 顔^{かお}の 上^{うへ}にも すつと 毛^け
はえるのです。

(やっぱり そうだ。)

りようしは こつそり お寺^{てら}を ぬけた
すと、急^{いそ}いで やど屋^やに もどり てっぽ
うを 持^もって きました。

しょうじの あなから てっぽうの さ
きを さしこみ、おぼうさん めがけて、





ぼうさんの 足の さきから もこもこ
毛^けが はえて きて、みるみるうちに 体^{からだ}
中^{うち}が 毛^けだらけに なりました。

そして、にわとりが 鳴^なき出^だした ころ
には、まるまると ふとった 古^{ふる}だぬきの
すがたに かわりました。

「やつぱり りょうしの いう とおりだ。」
「この 人^{ひと}が いなかったら、みんな ど
んな 目^めに あわされて いたかも しれ
ないぞ。」

村^{むら}の 人^{ひと}たちは、死^しんで いる 古^{ふる}だぬ
きを 見^みて、ほっと むねを なでおろし
ました。

(福井県の昔話)

おうちのうへ

ちよっぴり愉快でスリリングな昔話。まちがいなく古
だぬきだと思つて撃ち殺したのに、なかなか正体を現さ
ないので、狐師でなくても心配になってきます。
なにしろ相手は古だぬきだけに一筋縄ではいきません。
なかには死んで三日後に正体を現したたぬきもいます。
す。だから、そんなたぬきを祭る祠^{ほくら}もあります。



「いや、まちがいでなく 古^{ふる}たぬきだ。朝^{あさ}ま
 では きつと 正^{しょう}体^{たい}を あらわす はず
 だ。ほんとうの おぼうさんなら、わしを
 どんな 目^めに あわせても かまわん。」
 そう 言^いったものの、りようしは ちっ

とも 古^{ふる}たぬきに ならない おぼうさん
 を 見^みて、いよいよ 心^{しん}配^{ぱい}に なって き
 ました。
 その うちに、だんだんと 夜^よが 明^あけ
 て きました。すると どうでしょう。お

その とたん、まわりが 地しんみたい
に ゆれ、おにが 大きな くしやみを
しました。

は、は、は、はくしゅん！

（なるほど、これは くしやみの 出る
ひもだな。）

男の 人は、もう 一本の ひもを 引
いて みました。

すると、おには 大きな 口を 開け、
わっはっはっは、わっはっはっは…。

と わらいだしました。

（いよいよ、おもしろくなって きたぞ。）

男の 人は、最後の ひもを 引っぱっ
て みしました。

さつきまで わらって いた おにが、
きゆうに なきはじめました。

うええん、うええん…。

（こりや いい ものを 見つけたぞ。も



A cartoon illustration of a young girl with a large nose, wearing a green dress with a red sash, crawling on all fours against a red background.

男の おとこ かし
人が ひと むかし、とても
いました。 気の き
強い つよい

でも、男の人は少しもこわがりません。

と 言いながら 下へ おりて いくと、

赤い かべに あか かこまれた おなかの
ころへ 出ました。

ふと、まえ前を み見ると、 うえ上から ひものよ
うな ものものが さんぽん三本、ぶらさがって いま
す。

「なんだこりや」。

男おとこの人は、一本いっぽんのひもを引ひっぱつてみました。

は、は、は、はくしょん!

ものすごい くしゃみと いっしょに、

男おとこの 人ひとは、おにの 口くちから 外そとへ とび

だしました。

「やい、もう 一いちど 飲のみこんで みるか。」

おには、あわてて 首くびを よこに ふる

と、あとも 見みないで にげて いきまし

た。



おうちのなかへ

「軽業師と山伏と医者」のラストを独立させたような昔話で、鬼が人間をくわなくなったといういわれ話になっています。鬼に飲みこまれた人が、くしゃみのでるひもと、笑いのひもと、泣きたくなるひもを一度に引っぱったのですから、どうにもなりません。どんなに強い鬼もやっぱり人間にはかなわないと、鬼に同情したくなります。

そんな ことが あってから、おには
もう 二にどと、人にんげん間を 食たべなく なった
そうです。

(岡山県の昔話)

し いっぺんに ひもを 引^ひっぱったら
どう なるか。

男

男^{おとこ}の 人^{ひと}は、三本^{さんぽん}の ひもを 一つ^{ひとつ}に
にぎりしめると、思^{おも}いっきり 引^ひっ

ぱって みました。

さあ、おには たいへん。

は、は、は、はくしょん!

わっはっはっは、わっはっはっは…。

うええん、うええん…。

くしゃみを したり、わらったり、ない

たり、いや もう えらい さわぎです。

それでも 男^{おとこ}の 人^{ひと}は、ひもを 引^ひっぱ

るのを やめません。

おには 苦^{くる}しくて 苦^{くる}しくて、今^{いま}にも

たおれそうです。

男^{おとこ}の 人^{ひと}は、三本^{さんぽん}の ひもを はなすと

くしゃみの ひもを か^{ちから}いっぱい 引^ひっぱ

りました。



ら、なんと火のなかから男の子がとびだしてきました。

「おじいさん、おじいさん。」

おばあさんはあわてて、おじいさんをよびました。

「こりや、きつと神様がさずけてく
ださったにちがいない。」

おじいさんもびっくりするやらよろ

こぶやら。この子に火太郎という

名前をつけました。

火太郎は一ぱいごはんを食べると

一ぱいだけ、二はいごはんを食べると

二はいだけ、ぐんぐん大きくなつて

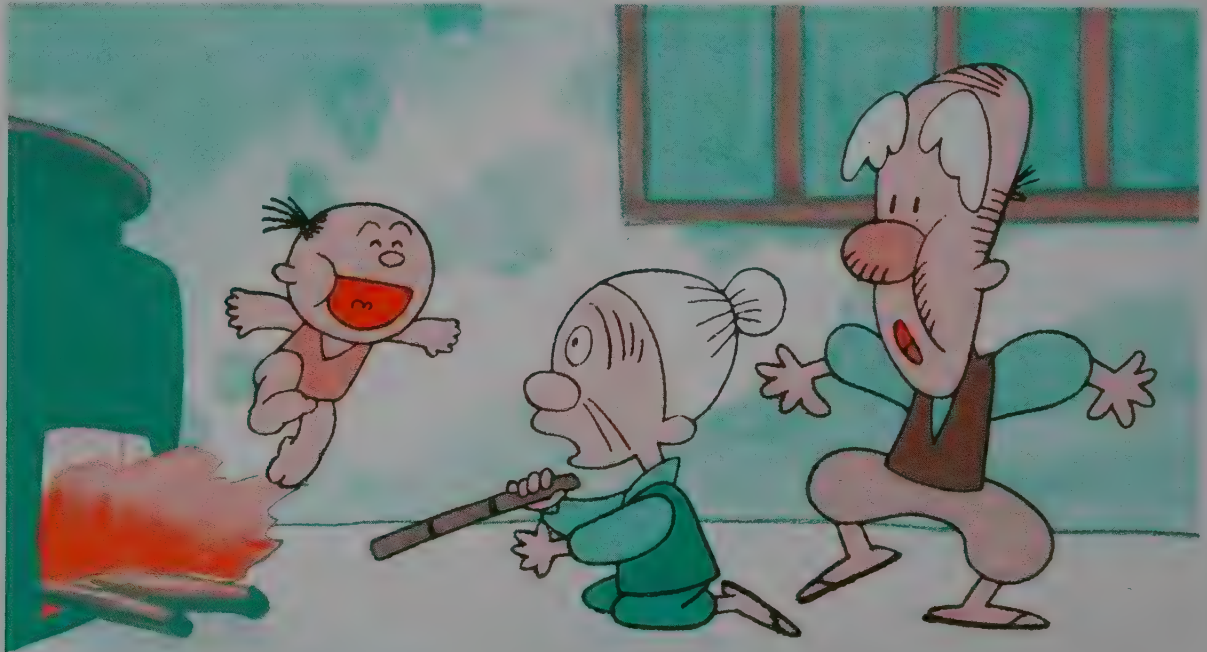
いきました。

ある日、おじいさんが山からもど

つてくると、えんがわに大きな柱が

立っています。

（はて、こんなところに柱があつた





火太郎と

長太郎

む

かし、むかし、ある ところにお
じいさんと おばあさんが いまし

た。二人とも 子どもが ほしくて たま

りません。そこで 毎日、近所の うじが

みさまに おまいりして、

「どんな 子どもでも いいから さずけ
てください。」

と おがんで いました。ある 日、おば

あさんが かまどで 火を もやして い

たら、

「おばあさん、おばあさん。」

と、よぶ 声が します。

(はて、だれが よぶのかな。)

おばあさんが きよろきよろして いた

大よろこびで、二人の子どもをいっし
 ようけんめい かわいがりました。二人と
 も 力が強く、山仕事なんか あつと
 いうまに かたづけて しまいます。
 それに わるいことは、たとえ との
 さまでも ゆるしません。お百しょうさん
 を こまらせて いる さむらいが いる
 と、すぐ とんで いって やっつけまし
 た。

と

ところが、ある 日、子どもたちの
 るすに とのさまの けらいが た
 くさん やって きて、

「お前の ところにいる 二人の 子ど
 もを 出せ。いやなら お前をつれて
 いく。」

と言いました。おじいさんが ことわる
 と、けらいたちは おじいさんを しばり
 あげ、おしろに つれて いきました。



のかな。

と ふしぎに 思^{おも}って いたら、柱^{はしら}が 動^{うご}いて 上^{うへ}の ほうから、

「おじいさん、おじいさん。」

と、よぶ 声^{こえ}が します。びっくりして

上^{うへ}を 向^むいたら なんと 見^みあげるような

男^{おとこ}の子^こが 立^たって いて、

「わしは 長太郎^{ちやうたろう}と いう もんだ。 神様^{かみさま}

の 言^いいつけて、ここへ やつてきた。」
と 言^いいました。

「柱^{はしら}と 思^{おも}ったら お前^{まえ}の 足^{あし}だったのか。

いやあ、こんな 大^{おお}きな 子^こどもまで さ
ずけて くださるなんて。」

おじいさんも おばあさんも またまた



えあがりしました。でも、火太郎は ちつとも あつがらず、にこにこして とのさまを見おろして います。

だって 火太郎は 火の なかから 生まれた 子ども。ちつとも あつく ないのです。

その とき、ろう屋の ほうで 大きな音が して、長太郎が とびだして きました。大男の 長太郎には、ろう屋を こわすのに おもちやを こわすほどの 力も いりません。

それを 見て、さすがの とのさまも 青く なり、

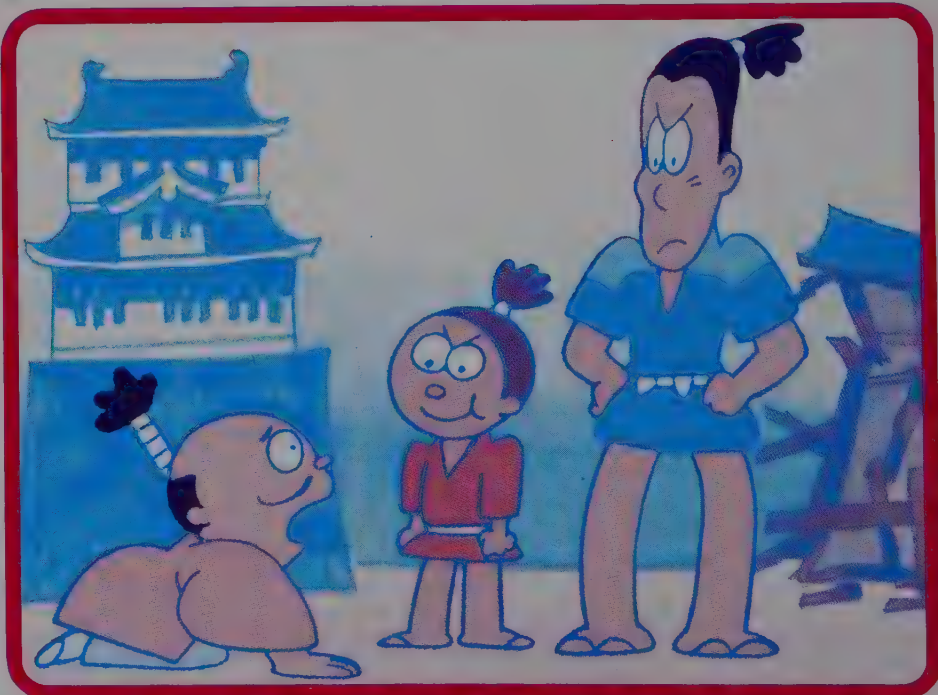
「二人とも ゆるすから、しろを こわさ なくて くれ。」

と、ないて あやまったそうです。

(島根県の昔話)

おうちの方へ

不思議な力を持つ二人の男の子。こんな男の子にかかっては、いかに殿様でもかありません。ゲイナミックで、冒険味たっぷりの昔話。いつも殿様にいじめられていた人たちが、こんなすごい話をつくって、心のなかで殿様をやっつけたのです。火の神と山の神の生まれかわりという信仰的な要素を持つスケールの大きい話です。





さあ、その ことを おばあさんから
知らされた 火太郎と 長太郎は すぐに
おしろへ 行き、

「どうか おじいさんを かえして くだ
さい。」

と 言いました。すると とのさまは、
「ようし、じじいの いのちは たすけて
やる。その かわり お前たちは 死けい
だ。」

と 言つて、長太郎を ろう屋に ぶちこ
み、火太郎を 広場につれて いきまし
た。

「こいつを 火あぶりに しろ。」

とのさまの めいれいで、火太郎は 木
に しばりつけられ、足の 下に まきが
つみあげられました。

「それっ！」

まきに 火が ついて めらめらとも

うちのわへ

ここでは、たぬきが二人のおかみさんに化けています
が、二つの仏様に化けたりする話もあります。いずれに
しても、その正体を見破るための、うその言葉にまんま
とひっかかってしまいます。いくらうまく化けても人間の
知恵にはかなわないというわけです。ちよつといたず
らをしたいただけなのに、なんだかたぬきがかわいそう。

「はて、どっちが 本ものかな。わしの
よめなら、耳を 動かすはずだが。」
その とたん、一人の おかみさんが
ぴくぴくと 耳を 動かししました。
「お前が にせものだ。」
木こりは いきなり、その 動いた 耳
に 火ばしを つきさしました。
「ぎやあ。」
火ばしを 耳に さされた おかみさん
は、たちまち たぬきの すがたに なり、
ころぶように にげて いきました。
「しようなない たぬきだ。」
木こりは ほっと して、おかみさんと
赤ちゃんを 見ました。 (兵庫県の昔話)



どっちが ほん 本もの



む

かし むかし、山^{やま}おくの 一^{いっ}けん家^やに 木^きこりと おかみさんと 生^うまれたばかりの 赤^{あか}ちゃんが いました。

ある 日^ひ、木^きこりが 仕^{しごと}事^じから もどつて くと、いろりの そばに 二^{ふたり}人の

おかみさんが すわって います。

顔^{かお}も、着^き物^{もの}も いる 着^{きもの}物^{もの}も そっくりで、

どっちが ほんとうの おかみさんか 見^み

分けが つきません。おまけに 二^{ふたり}人^{にん}とも

赤^{あか}ちゃんを だいて いて、赤^{あか}ちゃんの

顔^{かお}と 着^{きもの}物^{もの}も そっくり。

(さては、たぬきの しわざだな。)

木^きこりは、わざと 平^{へい}気^きな 顔^{かお}で おか

みさんたちの よこに すわると、いろり

の なかに 火^ひばしを 入^いれました。

火^ひばしは いろりの 火^ひで まっ赤^かに

なりました。それを つかんで 木^きこりが

言^いいました。

大工さんは、むすめさんをおよめに

したかったので、

「よろしい。一日でたてましょう。」

と言つてしまいました。

ところが、よく考えてみたら、そんな

こと、できるわけがありません。

(弱つたなあ。どうしよう。)

大工さんはしかたなく、わら人形を

二千こもつくつて、なにやらおいのり

をしました。

それから、わら人形に、ふうつと息を

かけると、どうでしょう。わら人形はた

ちまち、人間になつてはたらきだし、

あつというまに、たたみが六十まいも

ある大きな家をたてることがで

きました。

大工さんは、大よろこびで、むすめさん

のところへ行き、

「やくそくどおりに家をたてたから、

わたしのよめになつてください。」

と言いました。

むすめさんがきてみると、そこには

大きくてりっぱな家がたつていま

す。

「しかたありません。あなたのよめに

になりました。」

そういつて、むすめさんは大工さん

のおよめさんになりました。



大工の神様と天人

む

かし、ある ところに、とても う
での いい 大工さんが いました。
でも 大工さんには、まだ およめさんが
ありませんでした。

そこで、同じ 村に きれいな むすめ
さんが いたので、

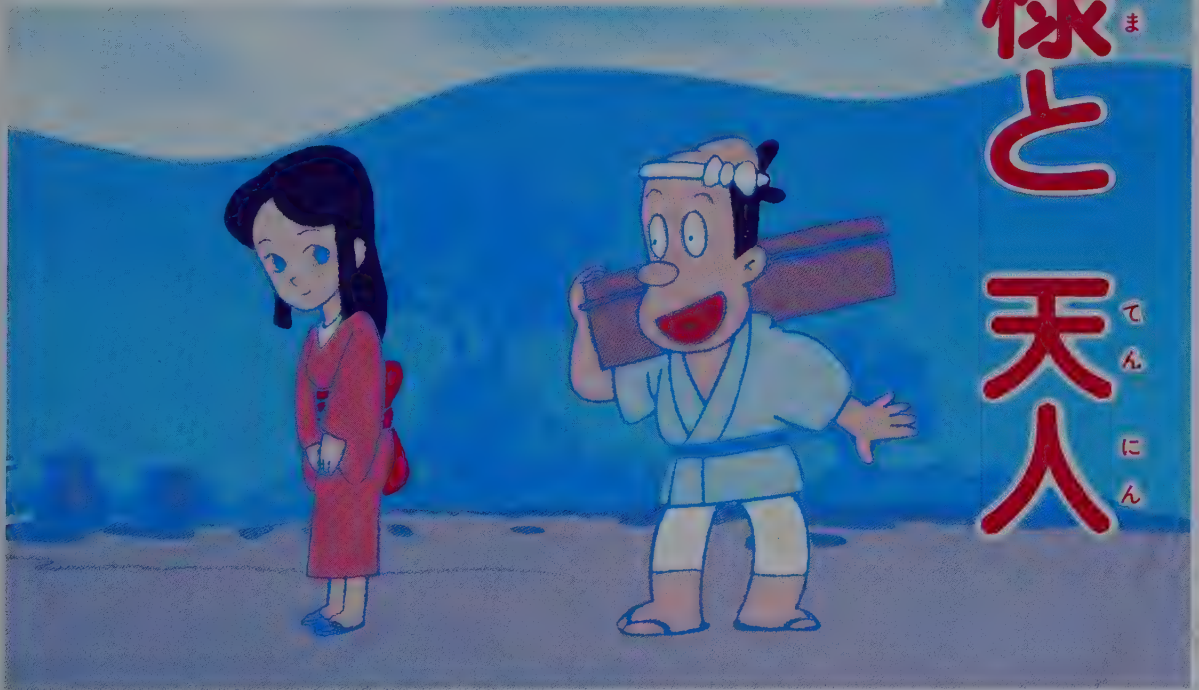
「ぜひ、わたしの よめになつて くだ
さい。」

と おねがいしました。

すると、むすめさんは、

「たたみが 六十まいも ある 大きな
家を 一日で たてる ことが できたら、

あなたの よめになりましょう。」
と 言いました。



にかえました。

神様は 千この わら人形を 海へ、の

こりの 千この わら人形を 山へ 行か

せる ことに しました。

神様が おいのりすると、すぐ 風が

ふいて きて、わら人形を 海と 山に

運んで いきました。

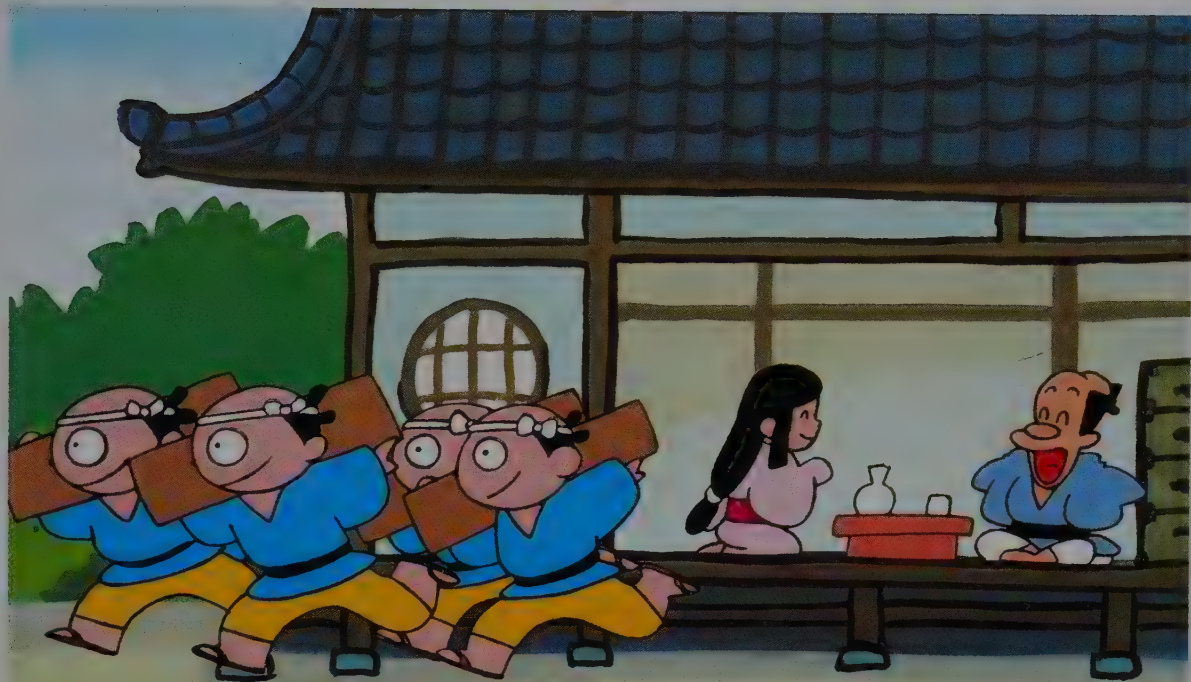
やがて 神様と 天人は、手を とりあ
つて 空 高く のぼって いきました。

(鹿児島県の昔話)

おうちの方へ

二千ものわら人形がたちまち人間になって働き出す。なんとも不思議で、ちよつぱり神秘的な昔話。しかし、そんなことができるのも道理、大工さんはでんごという天の国の神様だったのです。天の神様同士が地上で結ばれるというのもめずらしく、わら人形に対する素朴な信仰心がこんな話を生み出したのでしょう。





大工^{だいく}さんは、大きな^{おお}家で^{いえ} およめさん
と なかよく くらししました。二千^{にせん}人の^{ひと}
人^{ひと}たちは、あちこちの 国^{くに}へ 出^でかけ、家^{いえ}
を たてたり、橋^{はし}をつくったりしました。
ところが、何^{なん}年^{ねん}か すぎた ころ、お
よめさんが 大工^{だいく}さんに 言^いいまし
た。

と

「わたしは 人間^{にんげん}では なく、天^{てん}の 国^{くに}か
ら やつて きた 天人^{てんにん}です。そろそろ
天^{てん}の 国^{くに}へ もどらなくてはなりません。」
すると、大工^{だいく}さんが 言^いいました。
「じつは わたしも 人間^{にんげん}では ない。わ
たしは てんごと いう 大工^{だいく}の 神様^{かみさま}だ。
それでは、いっしょに 天^{てん}の 国^{くに}へ 行^いつ
て くらそう。」

そこで あちこちに 出^でかけて いる
二千^{にせん}人の^{ひと} 人^{ひと}たちを よびもどし、一^{ひと}人^り
一^{ひと}人^り、息^{いき}を ふきかけ、もとの わら人形^{にんぎょう}

兄^{あに}さんは、とんびを^{うま}だき、また馬^{うま}に乗^のって ぽつくり ぽつくり 歩^{ある}いて いったら 大^{おお}きな 川^{かわ}が あり^{あに}ました。兄^{あに}さんは 馬^{うま}に 乗^のった まま、ずんずん 川^{かわ}の なかへ 進^{すす}んで い^いきました。

ところが、川^{かわ}の まんなかまで きた時^{とき}、きゆうに 馬^{うま}が あばれだし、もう 少^{すこ}しで ふりおとされそうに なりました。

兄^{あに}さんは あわてて 馬^{うま}の 首^{くび}に しが みつきました。馬^{うま}は 岸^{きし}に かけ あがると 力^{ちから}いっぱい しつぽを ふりました。何^{なん}と しつぽに かっぱが つかまっています。

兄^{あに}さんは 馬^{うま}から とびおると、かっぱを つかまえました。

「どうして 馬^{うま}の しつぽなんかに つかまるんだ。もう 少^{すこ}しで 川^{かわ}へ 落^おちる ところだったじゃ ないか。」



かつぱの くれた たからもの



と

んとむかしあるところにと
てもなまけ者の兄さんがいま
した。毎日仕事もしないで、遊んでば
かりいるので、お父さんがおこつて
お金とやせた馬をわたしで、
「これをやるから、さつさと家を出
ていけ。」
と兄さんを家から追い出してしま
いました。

兄さんが馬に乗ってぼっくりぼ
っくり歩いていたら、子どもたちが
一わのとんびをつかまえ、みんなで
たたいたり、けつたりしていじめてい
ました。それを見た兄さんはとんび
がかわいそうになり、

「わしにとんびをゆずつてくれ。」
と、言ってお父さんからもらったお
金をぜんぶ、子どもたちにあげました。

そこで 兄^{あに}さんは、かっぱの 頭^{あたま}の さ
らに、ぬれた 手^てぬぐいの 水^{みず}を しぼっ
て やりました。

りくに あがった かっぱは、頭^{あたま}の さ
らに 水^{みず}が なくなったら 何^{なに}も できな
いのです。かっぱは 大^{おお}よろこびで 川^{かわ}ま
で 走^{はし}って いきました。

兄^{あに}さんは、その 後^{うし}ろから 言^いいました。



「うそ ついたら、しょうちしないぞ。こ
の とんびは、火^ひの なかだつて 水^{みず}の
なかだつて 入^{はい}って いって、お前^{まえ}の 頭^{あたま}
の さらを わる ことが できるんだぞ。」

すると、かっぱは ふりかえって 言^い
ました。
「うそなんか 言^いわねえ。すぐ とつて
くる。」

すると かっぱは、手^てを 合^あわせて 言^いいました。

「おら、馬^{うま}の しつぽが だいすきで……。だから、つい……。でも、もう 二^にどとしないから かんべんして くれ。」

それを 聞^きくと、兄^{あに}さんは ますます いばって 言^いいました。

「いや、かんべん できない。頭^{あたま}の さらを たたきわって やる。」

「と、とんでもない。おらの たからものを 持^もって くるから、たすけて くれ。」

かっぱは あわてて 頭^{あたま}の さらを 手^てで かくしました。

「よし、そんなら たすけて やっても よい。」

「すまねえ。すぐ 川^{かわ}に もどって とつて くるから、おらの 頭^{あたま}の さらに ちいとばかり 水^{みず}を 入^いれて くれ。」





兄^{あに}さんは はらいっぱい ぼたもちを
食^たべました。それから、たからものの 木^きづ
ちを ふところに 入^いれ、ぽっくり ぽっ
くり 馬^{うま}に 乗^のって 家^{いえ}へ もどって い
きました。

兄^{あに}さんは お父^{とう}さんの 前^{まえ}で、お金^{かね}やら
米^{こめ}やらを どつきり 出^だして みせました。
すると お父^{とう}さんは、とてもよろこんで、
「もう、どこへも 行^いくな。」
と 言^いいました。

かつばに もらった 木^きづちの おかげ
で、お父^{とう}さんと 兄^{あに}さんは いつまでも
なかよく くらしたそうです。

(秋田県の昔話)

おうちの方へ

かつばは水陸両生の妖怪で、頭の上に皿があり、その皿の水がなくなると力を失ってしまいます。馬のしっぽを引いて川へ引きこもうとするのもかつばの特質で、そのおわびにたいていは、おぼれた人を助ける証文を渡すという話になるのですが、ここではすてきな木づちをくれる話です。こわいかつばでも、所詮は人間の味方です。

兄

さんが しばらく 川の なかを
見ていたら、かっぱが 顔を 出し、

「たからものは、これです。」

と 言っ、古い 木づちを わたしまし
た。

「何だ こりや。」

兄さんは その 木づちで そばに あ
った 石ころを たたいて みました。す
ると 木づちの なかから、まめつぶが
一つ ころがりてました。

「まめつぶ 一つしか 出ない 木づちな
んで。わしを ばかに する つもりか。」

「と、とんでもない。だまって たたけば、
まめつぶしか 出ないが、ほしい 物の
名前を 言っ、たたけば、何だっ、出
る。」

言っ、かと思っ、かっぱは 川の
そこへ もぐっ、しまいました。



「うそ ついたら しょうちしねえぞ。わ
しの とんびは 川の そこへだっ、行
けるんだぞ。」

兄さんは、はらが へっ、いたので、
「ぼたち 出ろ。」

と 言っ、木づちを ふりました。
すると どうでしょう。目の 前に ぼ
たちも どっさり、入った 重箱が
あらわれました。

「なるほど。こいつは すごいや。」

ほうほうは ないものか。」

若者^{わかもの}たちが 集^{あつ}まって、そうだん しましたが、だれ 一人^{ひとり} おしようにさんに 勝^かてる 者^{もの}が ありません。

すると、一人^{ひとり}の 若者^{わかもの}が 言^いいました。

「いくら おしようにさんだつて、お金^{かね}入りの 米^{こめ}だわらは かつげまい。」

「お金^{かね}入りの 米^{こめ}だわらだつて。」

みんなが、首^{くび}を かしげました。

「そうさ、米^{こめ}だわらの なかに、米^{こめ}と いっしょに お金^{かね}を どっさり 入^いれて おく。そいつを おしようにさんに かつがせるんだ。」

「なるほど。」

「わかったら、できるだけ 重^{おも}い お金^{かね}を 集^{あつ}めて こい。」

若者^{わかもの}たちは、手^て分^わけして 重^{おも}い 銅^{どう}の お金^{かね}を たくさん 集^{あつ}めて きました。

「でも、この お金^{かね}を とられて しまつたら どう する。」

「だいじょうぶ。ちよつとの 間^{あいだ}、かりるだけだ。」

若者^{わかもの}たちは、米^{こめ}だわらの なかに、米^{こめ}と いっしょに お金^{かね}を つめこみました。

「こりや、重^{おも}い。とても 持^もちあげられそうもないや。」





お金入りの 米だわら

と

んと むかし、ある 村のお寺に、
とても 力持ちの おしyouさんが
いました。

もう すっかり 年をとって いるの
に、重い 米だわらを ひよいと 持ちあ
げて しまえます。

そればかりか、力の 弱い 若者たちを
見ては、

「わかい 者が、米だわら 一つ 持ちあ
げられないで どう する。そんな こつ
ちや、一人前の お百しyouさんに なれ
ないぞ。」

と しかります。

だから、村の 若者たちは、おもしろく
ありません。

「年よりの おしyouさんから、ばかに
されるなんて くやしいなあ。」

「なんとか おしyouさんを、やつつける



「それじゃ かつぐぞ。」

おしょうさんは、両手^{りょうて}に ペット つばきを かけると、米^{こめ}だわらを つかみました。

「なるほど、こいつは 重い^{おも}や。」

それを 見て、若者^{わかもの}たちは 顔を 見合^{みあ}

わせました。

(そうれ 見^みろ。やっぱり、持ちあがらないぞ。)

(手^てを はなしたら、みんなで 大わらいして やろう。)

ところが、おしょうさんは すました

おうちの方へ

和尚^{おしょう}さんをやつつけるつもりが、逆にお金までとられてしまうという愉快な昔話^{昔話}です。昔話の和尚^{おしょう}さんといえは、きまつてけんぼうで、小僧^{しょう}さんにやられてしまうというのが一般的ですが、この和尚^{おしょう}さんは怪力や呪力^{呪りりき}を持つ高僧^{こうそう}伝説が昔話化したもので、庶民にはかなわない、ひよわな若者をいましめる人物として描かれています。

顔^{かお}で、ひよいと 米^{こめ}だわらを 持ちあげ、

かたに のせました。

くるつと まわって 見^みせ、

「やくそくどおり、こいつは もらったよ。」

と 言^いって、どさりと 米^{こめ}だわらを おろ

しました。

それから 米^{こめ}だわらの 口^{くち}を 開^あけ、

「ほう お金^{かね}入りの お米^{こめ}とは ありがた

い ことだ。なんまいだあ、なんまいだあ。」

と 手^てを 合^あわせました。

びっくりするやら、なさけないやら、若^{わか}

者^{もの}たちは、ぽかんと 口^{くち}を 開^あけた まま、

いつまでも おしょうさんの 顔^{かお}を 見^み

いました。

(石川県の昔話)

そ

こで、みんなできつとこき 米だ
わらを かつきあげ、お寺へ 出か
けて いきました。

すると、おしょうさんが 出てきて、
「なんだ、なんだ。いい わかい 者が、
たった 一ぴょうの 米だわらを みんな
で かつぐとは なさけない。」
と 言いました。

若者の 一人が、くやしいのを がまん
して 言いました。

「とんでもない。この 米だわらは とく
べつで、いくら おしょうさんだつて、一
人では かつきません。もし 一人で か
つげたら、わしら どんな ことでも し
ます。でも、かつけなかったら、二どと
ちか 力じまんを したり、わしらを しかつた
り しないで ください。」

「よし よし、わかった。何が 入って



いるかは 知らんが、もし 一人で かつ
ぐ ことが できたら、この 米だわらを
もらつても よいかな。

「いいですとも。」

みんなは、米だわらを かつけずに よ
ろよろ たおれる、おしょうさんの すが
たを そうぞうして、にやりと わらいま
した。

いよ 顔を 赤くして 言いました。

「今、お酒を 飲んだばかりです。こんな 赤い 顔して お見まいには 行かれませ

ん。だれか ほかの 人を さそつてく ださい。おとうふさんに よろしく。」

だいこんは その 足で、さといものと ころへ 行きました。

「おとうふさんが 病気だそうです。二人 でお見まいに 行きませんか。」

すると、こいもたちの 世話を して いた さといもが 言いました。

「それは お気のどく。いっしょに 行きたいのですが、この とおり、たくさんの 子どもが いますので、出かける ことは できません。」

「それじゃ 子どもさんも いっしょに。 にぎやかな ほうが おとうふさんも よろこぶと 思いますよ。」



まめに なれない とうふ



む

かし、おとうふが 病氣^{びょうき}に なりま
した。それを 聞^きいた だいこんが、
お見^みまいに 出^でかける ことに しました。
でも、一人^{ひとり}で 行^いくのは はずかしいので、
ごぼうを さそいに 行^いきました。
「おとうふさんが、病氣^{びょうき}だそうです。二人^{ふたり}
で お見^みまいに 行^いきませんか」

すると、ごぼうが 言^いいました。

「わたしは さっぱり ふろに 入^{はい}らない
ので、体中^{からだじゅう}が あかだらけ。色^{いろ}の 白^{しろ}い
だいこんさんと いっしょに、行^いく こと
は できません。どうか、よろしく おつ
たえ ください。」

そこで だいこんは、にんじんの ところへ 行^いきました。

「おとうふさんが 病氣^{びょうき}だそうです。二人^{ふたり}
で お見^みまいに 行^いきませんか。」

すると、赤^{あか}い 顔^{かお}の にんじんが、いよ



だいこんが はげまりました。それでも、
とうふは こまった 顔で 言いました。

「もう まめになる ことは できませ

ん。わたしは とうふですから。」

(なるほど、それは お気のどくに。)

だいこんは 心の なかで 言いました。

「まめになる」と いうのは、元気に

なる」と いう 意味です。でも、まめか
ら つくられた とうふは 二どと まめ
にも どれませんからね。(愛媛県の昔話)

おうちの方へ

ものの名前やその特質をたくみに取り入れた言葉遊びの楽しさを持つ昔話です。にんじんは酒を飲んだように赤く、里芋はたくさんの小さな芋をつけているところから、こんな発想が生まれました。それにしても、「とうふだけに、まめにはなれない」というおち見事で、まめ(元氣)と豆をひっつけた言葉遊びのセンスは抜群です。

「とんでもない。子どもたちがさわいだら病気にさわれます。すみませんが、よろしくおつたえください。」

「それじゃ、しかたがありません。一人で出かけることにしましょう。」

だ いこんは一人でとうふのころへ お見まいに行きました。

「おとうふさん、ぐあいはいかがですか。ごぼうさんもにんじんさんもさといもさんも心配していました。早く元気になつてください。」

すると、とうふが言いました。

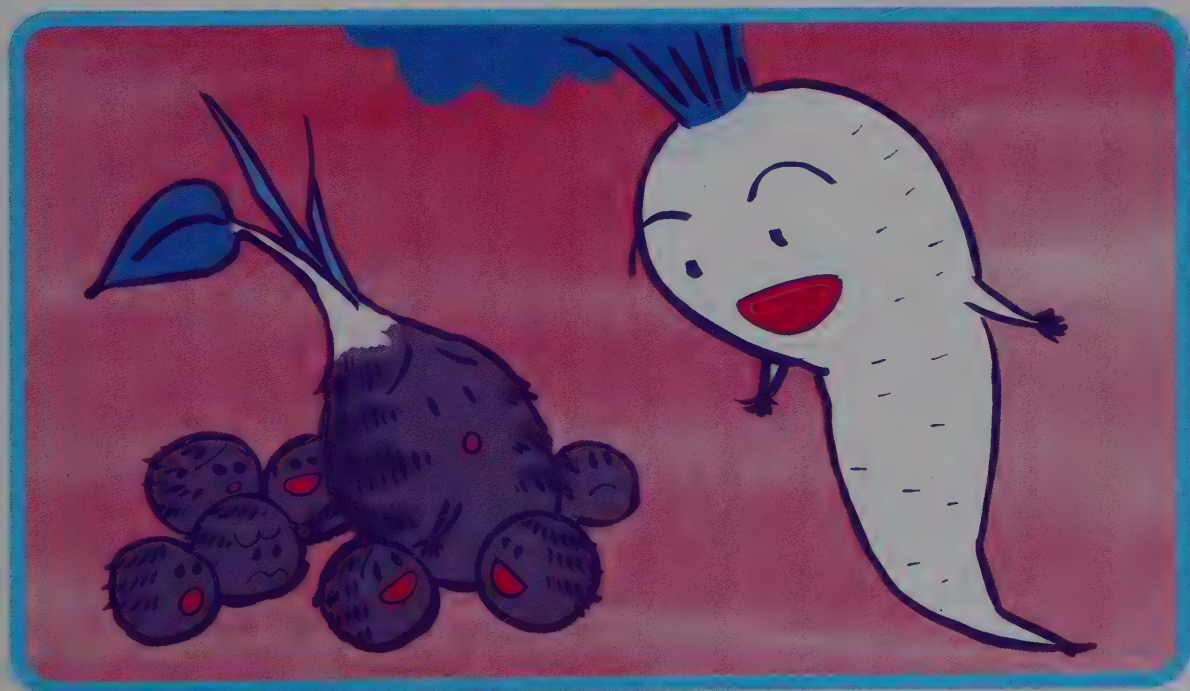
「ありがとう ございます。おかげさまでだいぶ よくなりました。でも、

もう元の体にはもどけません。」

「どうしてですか。そんな気の弱い

ことを言つてはいけません。早くま

めになつてください。」





て、まつの 木の上から、

「とって 食おう。とって 食おう。」

と 鳴きました。

えびと たこと ふぐは、びっくりして
からすに 言いました。

「そんなの ひどいよ。すぐ 海へ もど
るから、かんべんして ください。」

「いいや かんべん できない。こんな
ところへ 出て くるなんて、なまいきた。

お前たちの 家は、海の そこじや ないか。」

「そんなら たこおどりを して 見せる
から、食うのだけは かんべんして くだ
さい。」

たこが 言いました。

「わたしも、えびおどりを して 見せます。」

えびが あわてて 言いました。

「なるほど、そいつは おもしろい。よし、
そんなら 一ぴきずつ おどって もらお

えびと
ふぐめ

たこと
おどり



と

んと むかし、ある 夏の 暑い
日に、えびと たこと ふぐが 海

から 出で、はまべの まつの 木の下
で 休んで いました。

「いやあ、海の 外へ 出るのも 気持ち
がいいもんだ。」

えびが 言いました。

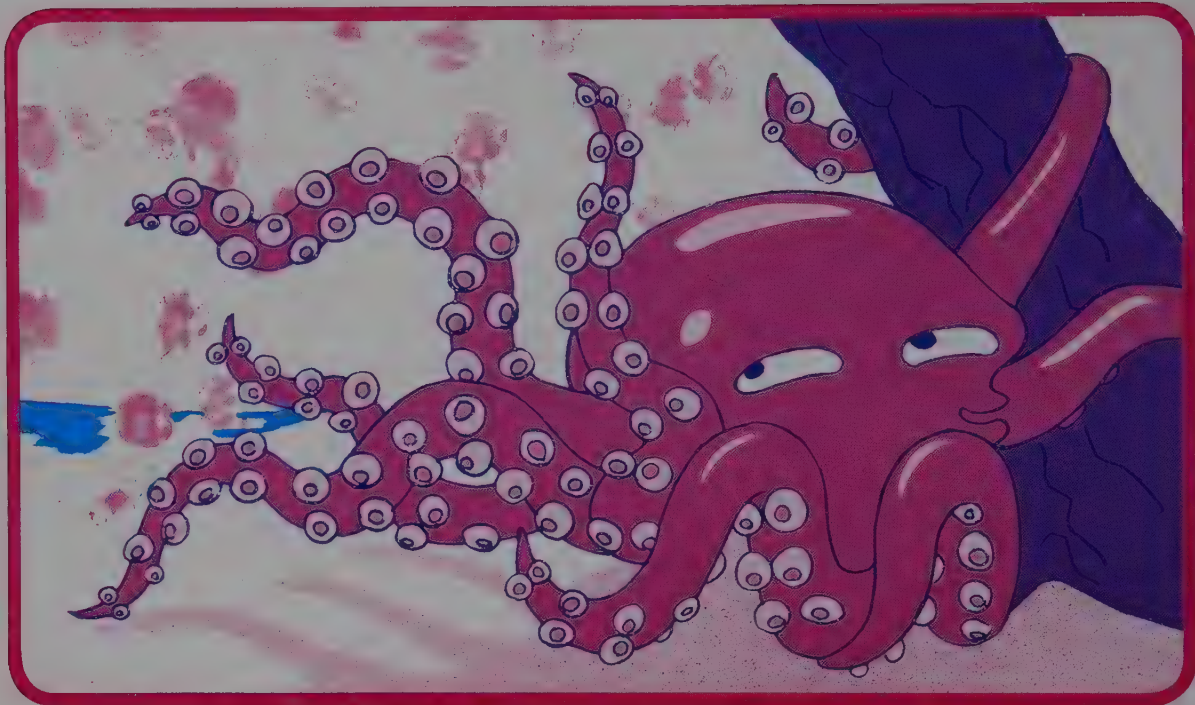
「ほんと、風にかれるのも わるく
ない。」

たこが 言いました。

「体の なかまで すずしく なるみたい
だ。」

ふぐが 言いました。

すると、そこへ からすが とんで き



風^{かぜ}に ゆらゆら さいて ちる

うたいながら、たこは のこりの 足^{あし}を
広^{ひろ}げて おどりました。足^{あし}の いぼいぼが
動^{うご}いて、まるで 風^{かぜ}に ゆれる うめの
花^{はな}に そっくり。

「いいぞ、いいぞ。」

からすが、はねをばたばたさせました。

「では、つぎは ふぐの 番^{ばん}。」

でも、ふぐは 何^{なん}にも できないので、
小^{ちい}さく なって 言^いいました。

「わたしは、ごらんの とおりで 何^{なん}にも
できません。どうか かんべんして くだ
さい。」

「だめだ。何^{なに}も できないのなら、お前^{まえ}を
とって 食^くう。」

からすが おこりました。ふぐは しか
たなく どてんどてんと ひっくりかえり
ながら うたいました。

う。

からすが「言いました。」

ふぐは おどる ことが できないので、
だまって うつむきました。

「それでは、まず わたしから。」

えびが 前に 進み出ました。

海の 上には すてきな

三日月様よ

ぴよんと はねれば

なみが ちる

うたいながら、えびが はねあがりまし
た。その すがたは、まるで 海の上
うかんだ 三日月に そっくり。

「いいぞ、いいぞ。」

からすが 言いました。

こ んどは たこが 進み出で、まつ
木に 足を 一本 かけました。

まつには 竹と うめの 花



前の おどりも なかなか おもしろかつたぞ。」

言^いったかと思^{おも}うと、

「もう とつて 食^くわねえ、とつて 食^くわねえ。」

と、鳴^なきながら とんで いきました。

「やれやれ たすかった。二^にどと りくへあがるのは やめよう。やっぱり、海^{うみ}の

そこの ほうが 安心^{あんしん}だ。」
えびと たこと ふぐは、あわてて 海^{うみ}
の なかへ もどつて いきました。

(鳥取県の昔話)

おうちのちへ

えびのはねた姿に三日月を思い、たこが足を広げた姿に風の中の梅の花を思う、ユーモアたっぷりの話ながら、すばらしいイメージが広がってきます。しかも、ふくれっ面しかできないふぐが、からだに毒があるといつてからすに食^くべることをあきらめさせるとんちも愉快。知らないところへ行^いつては危険というのがテーマ。



「わたしみたいな ものまでも

おどつて 見せろとは

あんまりな

ふぐに できるのは

ふくれつつら」

「だめだ、だめだ。そんな おどりじゃ。

もう かんべん できない。」

すると ふぐが かくごを きめて 言

いました。

「しかたが ありません。どうぞ わたし

を 食べて ください。でも、ふぐの ど

くに あたつても 知りませんよ。」

それを 聞いて、からすは はっと 気

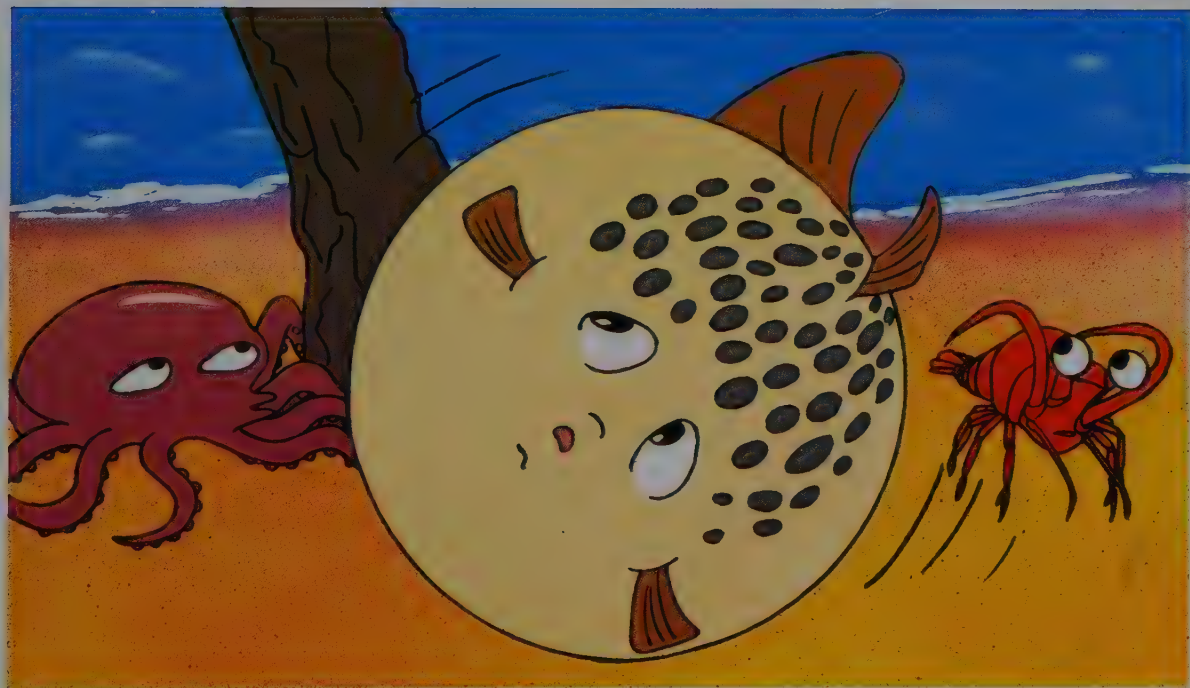
が つきました。

ふぐの 体には、おそろしい どくが

あって、うっかり 食^たべると 死^しんで し

まうのです。

「もう いい。かんべんして やろう。お



俵

の藤太は、ゆみに やを つがえ、
大むかでの 頭 めがけて 打ちこ
みました。

すると どうでしょう。やは みごと、
大むかでの 首に つきさりました。い
たくて いたくて 今にも 死にそうです。
大むかでは、とうとう その 場に た
おれて しまいました。そこへ 子分たち
が やって きました。
「親分、しっかりして ください。あんな

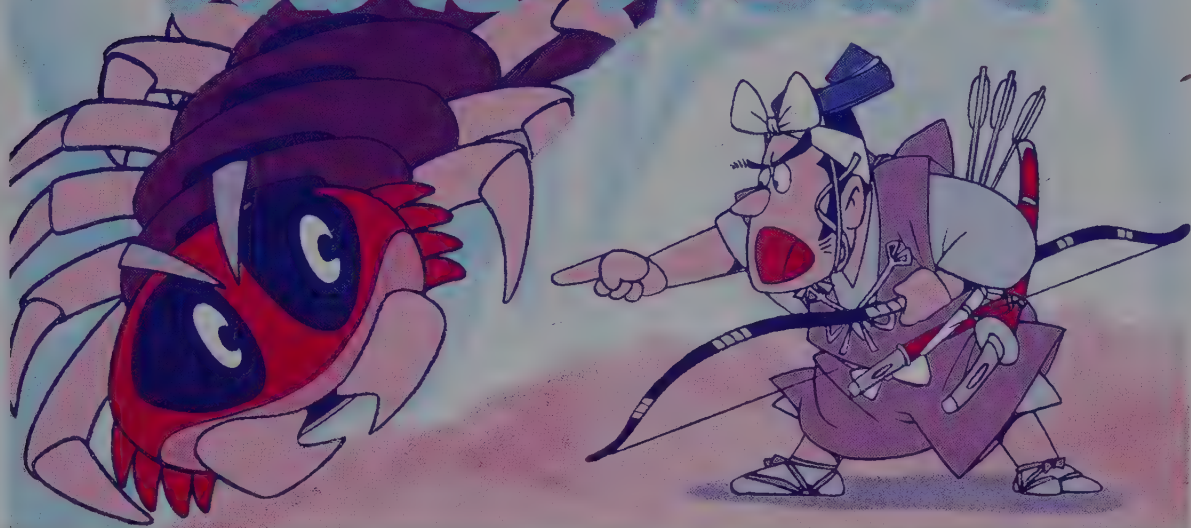
おうちの方へ

大むかでのをやった弓の名人俵の藤太の有名な伝説
「瀬田の唐橋」を素材にした笑い話で、山を七まきする
ほどのむかであつても、それを一つ上まわるはちまき
をした藤太にはかなわないというわけです。たわいのな
いだが、それのように見えて、そのおかしさは幼児にも充
分通用する言葉あそびの楽しさがあります。

ちっぽけな 人間に 負けるなんて どう
したのです。親分は、山を七まきも で
きるじゃ ないですか。
「なにを 言うか。こつちは 七まきでも、
むこうは はちまき、負けるのが あたり
まえだ。」
(高知県の昔話)



ま おお 負けた 大むかで



む

かし、大江山^{おおえやま}というところに、
山^{やま}を七まきもする大むか^{おお}でが
いました。こんなむか^{むか}でがいたのでは
山仕事^{やましごと}にも行^いけません。

そこで俵^{わたら}の藤太^{とうた}というゆみの名^め
人^{じん}にたのんで、大むか^{おお}でをたいじして
もら^{もら}うことにしました。俵^{わたら}の藤太^{とうた}は
頭^{あたま}にはちまきを^{おおえやま}して、ゆみをかかえ、
大江山^{おおえやま}へ行^いきました。

「わしは日本^{にっぽん}一のゆみの名人^{めいじん}、俵^{わたら}の
藤太^{とうた}だ。お前^{まえ}と勝負^{しょうぶ}しにきたから出^で
てこい。」

それを聞^きいた大むか^{おお}でが首^{くび}をあげ、
「ふん、いくらゆみの名人^{めいじん}でも、お前^{まえ}
は人間^{にんげん}じゃないか。わしに勝^かてる
わけがない。」

と、ばかにしました。
「ようし、そんなら見^みていろ。」

おじいさんは、思わず^{おも}声^{こえ}を出^だしました。
 こんな おいしい お酒^{さけ}は 今^{いま}まで 飲^のんだ ことが ありません。それに 一口^{ひとくち} 飲^のんだだけで、心^{こころ}が うきうきして きま
 す。おじいさんは、とうとう すずめたち
 と いっしょに なって おどりはじめま

した。

「はあ こりや こりや
 チュン チュン チュン チュン」
 おじいさんの かけ声^{こえ}に 合^あわせて、す
 ずめたちも わに なって おどります。
 もう 楽^{たの}しくて 楽^{たの}しくて、おじいさんは



すずめになった若者



む

かしむかし、あるところに、びんぼうでも正直なおじいさん

とおばあさんが住んでいました。

ある日、おじいさんがいつものように山へたきぎをとりに行くと、どこからともなく、おいしそうなお酒の

においがながれてきました。

(はて、ふしぎなこともあるものだ。) おじいさんがおいのするほうへ歩いていくと、竹やぶの前に出ました。

すると、どうでしょう。竹やぶのなかに竹でできた酒だるがあつて、すずめたちがそのまわりでチyunチyun、楽しそうにおどつています。

(なんてかわいいすずめたちだ。)

おじいさんがにこにこして見ていたら、一わのすずめがとんできて、

「さあ、おじいさんもお酒を飲んでください。このお酒を飲むと、きつと

しあわせになりますよ。」

と言いました。おじいさんはすずめたちのところに行つて、そのお酒をごちそうになりました。

「うまい。」

「おれにも、その酒を飲ませてくれ。」
と 言いました。すると すずめたちは、
首を ふって 言いました。

「この お酒を 飲むと、とんでもない
ことにならから、やめた ほうが いい。」

それなのに 若者は、いきなり 酒だる
を つかむと 一息に お酒を 飲んで

しまいました。すると、どうでしょう。若

者の 体は みるみる 小さく なって

いき、とうとう すずめになっ て しま

いました。



おうちの方へ

正直なおじいさんと欲ばりの若者を対比して、おろかな心をいましめるという典型的な昔話ながら、お酒を飲みすぎた若者がすずめになってしまったところが、なんとも楽しい。まるで「舌切り雀」と「若返りの水」をミックスしたような昔話ですが、昔の人たちは、どんな場所にも幸運を夢みて、こんな昔話を生み出しました。

すずめになつた 若者は、竹やぶを
追われ、チュンチュン 鳴きながら どこ
へともなく とんで いきました。
でも、おじいさんの 家では、すずめた
ちが 言ったように いい ことが つづ
いて、やがて 村一ばんの お金持ちに
なつたそうです。
(和歌山県の昔話)

時間^{じかん}の たつのも わすれて しまう ほ
どでした。

やがて 夕方^{ゆうがた}に なって、ようやく お
どりが 終^おわりました。

「いやあ、楽^{たの}しかった。ありがとう。」

おじいさんは、すずめたちに お礼^{れい}を
言^いって 帰^{かえ}って いきました。

さ

て、おじいさんの 家^{いえ}の となりに、
なまけ者の^{もの} 若者^{わかもの}が 住^すんで いま
した。おじいさんの 話^{はなし}を 聞^きくと、若者^{わかもの}
も その お酒^{さけ}が 飲^のみたく なり、つぎ
の 日^ひ、さっそく 山^{やま}へ 出^でかけて いき
ました。

お酒^{さけ}の においの する ほうへ 歩^{ある}
て いくと、おじいさんの 言^いった とお

り、竹^{たけ}やぶが あって、すずめたちが お

酒^{さけ}を 飲^のみながら おどって いました。

若者^{わかもの}は 竹^{たけ}やぶに 入^{はい}って いくなり、



出^でかけて いきました。

さむらいは 山道^{やまみち}の とちゅうで 立^たち

どまり、刀^{かたな}に 手^てを かけた まま、きつ

ねの あらわれるのを 今^{いま}か 今^{いま}かと 待^ま

って いました。

ところが、いつまで 待^まっても きつね

が あらわれる どころか、草^{くさ}の はっぱ

が そよりも 動^{うご}きません。

(わしが くと 知^しって 出^でて こない

んだな。いくら ずるがしい きつねで

も いいかげんな もんだ。弱^{よわ}い 者^{もの}ばか

り いじめて、さむらいが くと すぐ

にげて しまう。)

さ

むらいは しかたなく 近^{ちか}くに あ

った 石^{いし}の 上^{うえ}に こしを おろし、

べんとうづつみを 開^{ひら}いて にぎりめしを



にぎりめしを とられた さむらい



む

かし ある 山の道に ずるかし
こい きつねが 住んで いて、そ
こを 通る 人を だましては 荷物を
とって いました。

(こまった きつねだ。)

と 思っても、だれ 一人 きつねを や
つつける 勇気が ありませんでした。
ところが、それを 聞いた 一人の さ
むらいが、

「きつねの くせに 人の 荷物を とる
なんて とんでもない やつだ。わしが
たいじして やろう。」

と 言って、にぎりめしの べんとうづつ
みを せおい、きつねの いる 山道へ

ほうへ にげて いきました。

ふりかえって みると、馬を 追っかけ

て きた お百姓さんの すがたも

ありません。

「やられた。」

さむらいは、からに なった べんとう

づつみを 投げすて くやしがりしましたが、

もう あとの まつりです。

(さすがは 頭の いい きつねだ。さむ

らいの わしまで だますとは。)

さっきの 大いばりも どこへやら、さ

むらいは こそこそ にげるように して

山を おりて いきました。

(岩手県の昔話)

おうちの方へ

相手が強いさむらいなら、こつちも特別の化け方ではないと通用しません。馬とお百姓さんに変身して、あつというまに、にぎりめしを取ってしまうきつねのあざやかな手口は、まるでスピーディなマジックショーを見る思いがします。あの利発そうに見える表情から、きつねの化け方が、たぬきにくらべて、はるかに複雑怪奇です。



食べはじめました。

その時、きゆうに、山道の下のほうで、何やら人のさけぶ声がしました。

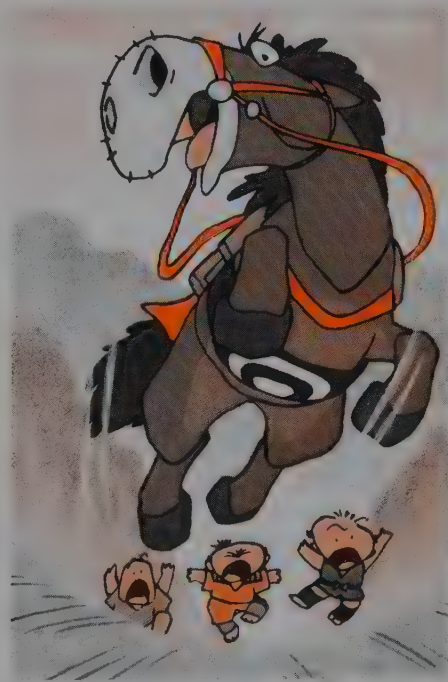
（さては、きつねがあらわれたか。）
さむらいはにぎりめしをおいて立ちあがりました。

すると山の下のほうから一頭の馬が、かけだしてきて、後ろから二、三人のお百しようさんが追いかけてきます。

（なんだ。馬がにげだしたのか。よし、わしがつかまえてやろう。）

さむらいは道のとちゆうに立って馬を待ちかまえました。

ところがその馬のいきおいのはげしいこと、さむらいめがけて頭からつつこんできます。



「あぶない。」

さすがのさむらいもあわてて、とびはね、よこの草むらへとびこみました。
そのとたん、馬がにぎりめしにくらいつき、口にくわえたまま走っていきました。

「しまった。」

さむらいがあわててはねおきると、馬のすがたはだんだん小さくなり、いつのまにかにぎりめしをくわえたきつねのすがたになって、むこうの

もも 入^{はい}って いて、ぐつぐつ にえて
います。おいしそうな おみその におい
が 家^{いえ}中^{じゅう}に ながれて いきます。

「まだ にえないのかなあ。」

「おなかが ぐうぐう 鳴^なって、もう が
ま^まん できないよ。」

子^こどもたちは、わいわい 言^いいながら、
なべを にらんで ためいきを つきました。

その 時^{とき}です。おもての 戸^とが がらつ
と 開^あいて、つめたい 雪^{ゆき}が ふきこんで
きました。

みんな びっくりして ふりむくと、ど
うでしょう。七つぐらいの 男^{おとこ}の子^こが 立^た
って いました。見た ^みことも ない
顔^{かお}です。

「お前^{まえ}、どっから きた。」

「何^{なに}か 用^{よう}か。」

何^{なに}を 聞^きいても へんじを しません。



ぐっしより ざぶとん ぬれた



ず

うつと むかし、ある 山^{やま}の ふも
とに、お百^{ひゃく}しようさんの 家^{いえ}が あ

りました。とても にぎやかな 家^{いえ}で、お

じいさんと おばあさん、お父^{とう}さんとお

母^{かあ}さん、それに たくさんの 子^こどもが

いました。

大雪^{おおゆき}の ふった ある ばんの ことで

す。みんな いろりの まわりに 集^{あつ}まっ

て、いのししじるの にえるのを 待^まって

いました。

なべの なかには、いのししの 肉^{にく}に

だいこんや にんじん、おとうふに おい



「おら もう、おなかが いっぱいだ。」

そう 言ったかと 思うと、風かぜのように

消きえて いきました。

「お かしな 子こどもじゃ のう。何なにしに
きたのかな。」

「今いまじぶん どこへ 行くのだろう。」

みんな ふしぎそうに 首くびを ふりまし
た。

「いっしょに 食たべて いけば よかった
のに。」

言いながら お母かあさんが なべの ふた
を とりました。

「あれえ! ない。」

みんなも いっせいに なべの なかを
のぞきこみました。いったい どう した
と いうのでしょう。なべの なかは か
らっぽで、おみそしるだけが ぐつぐつ
にえています。

男の子は いろいろの そばに やつてく
ると、

「おらにも ちいと あたらせて くれ。」

みんな 楽しそうだな。」

と 言つて 火に あたりました。

「いいとも。もう すぐ いのししじるも

に えるから、いっしょに 食べて いけ。」

おじいさんが 言いました。

「お前、家は ないのか。」

「これから どこへ 行く。」

子どもたちが かわるがわる たずねて

も、だまつて なべを 見つめて いるだ

けです。

「さあ、おまちどおさま。あなたも いっ

しょに お食べ。」

お母さんが、みんなの おわんと いっ

しょに 男の子の おわんを 持つて き

て あげました。



お母さんが、なべの ふたを あけよう

と したら 男の子が きゆうに 立ちあ

がりました。

「ありがとう。おら すっかり あたたま

ったで、帰らして もらう。」

お母さんが、あわてて 止めました。

「えんりよなんか するんじや ないよ。」

すると、男の子は



「もしかして、雪こぞうかもしれな
ぞ。」

「雪こぞうだって?」

「そうだよ。むかしから、雪のふるば
んには 雪こぞうが 人間のすがたに
なって、ごちそうを 食べに くるんだつ
て。子どもの時、そんな話を聞いた
ことがある。あの 子の すわって い
た ところを 調べて みろ。」

おばあさんに 言われて 子どもたちが
男の子の すわって いた ざぶとんに
手を やると どうでしょう。ざぶとんは
水を こぼしたように ぐっしりと ぬ
れて いました。

(新潟県の昔話)

おうちの方へ

雪の夜のスリルたっぷりな昔話。夏の怪談とはひと味
違う趣きがあります。雪小僧も雪の妖怪の一つで、この
中でも語られているように雪の降る晩に人間の姿で人里
へ現れます。しかし、雪女や雪女郎のようなこわさはな
く、どこかおどけたところがあります。寒い夜のいのし
し汁なら雪小僧でなくても食べたくなってきます。



「あいつが 食べたんだ。」

「何が おなかが いっぱいだ。」

子どもたちは、男の子を つかまえよう

として 外へ とびだしました。でも、

どこへ 行ったのか 男の子の すがたは

なく、足あとも ありませんでした。

「おかしいな ことも あるものだ。」

子どもたちは 小首を かしげながら
もどつて きました。

「でも、いつの まに 食べたのかな。」

「そうだよ。ふたも 開けないで。」

子どもたちは おなかの すいたのも

わすれて なべを 見つめて いると、お

ばあさんが 言いました。

おじいさんは 家で こなを ひき、おばあさんは その こなで おだんごをつくりました。

それでも、ももたろうさんは 何にも しません。お天気の日も、雨の日も、ぶらぶら 遊んで いたそうです。

ある 日、おじいさんは ももたろうさんを つかまえ、

「お前も、もう 大きく なったのだから、小さい 子どもみたいに 毎日 遊んでばかり いては だめだ。ちつとは わしの仕事を 手伝え。」

と 言いました。

「そんなら きょうは おらが 山へ 行く。」

ももたろうさんが 一人で 山へ 行ったので、おじいさんは 大よろこび。

「おばあさん よろこべ。ももたろうも

仕事をする 氣に なったぞ。」

「よかった、よかった。それじゃ どつきりおだんごを つくっておきましょう。」

おばあさんも よろこんで、ももたろうさんの ために おだんごを つくって 待つ ことに しました。

と

ころが、山へ きた ももたろうさん、どう して 木を 切ったら よいのか わかりません。今まで 一どだつて 仕事をした ことが なかったのです。





もうひとりの ももたろうさん

と

んとむかし、おじいさんと おばあさんが ももたろうさんといっしょに住んでいました。

でも、このももたろうさんは、力が強いばかりで、仕事もせず、毎日、遊んでばかりいます。おにが島へおにたいじに 行った ももたろうさんとは、えらいちがいです。

天気の良い日は おじいさんが 山へしばかりに、おばあさんは 川へせんたくに出かけます。雨がふったら

「あれまあ、木^きなんか ひきぬいたら、もう かれえだが とれなく なって しま^うのに。」

おばあさんも びっくりするやら あきれるやら。

ももたろうさんは 二人^{ふたり}の 前^{まえ}に くる

と、

「おら、こんなに 仕事^{しごと}して きたぞ。」

言うなり かついで きた 木^きを 家^{いえ}に

おうちの方へ

日本人ならだれでも知っている桃太郎。しかし、理想的な桃太郎ばかりでなく、一人ぐらいいはもつと人間的で、おろかなところがあってもいいではないか。そんな思いにこたえてくれる愉快な桃太郎の昔話です。やつと仕事にでかけたと思ったら大木をかついできて家までつぶしてしまう。それだけに、とても親しみを感じます。

立てかけました。
その とたん、家^{いえ}は バリバリとつぶれて おじいさんも おばあさんも その 下^{した}じきに なって しまいましたとき。

(徳島県の昔話)



しばらく 考えていた ももたろうさんは、いきなり 一本の 木に だきつく
と、力 いっぱい ひきあげました。すると、
どうでしょう。木は 根元から すつ
ぽり ぬけました。

「なんだ。木を 切るより やさしいや。」
ももたろうさんは、まわりに ある 木
をつぎつぎと ひきぬいて しまいました。
た。

さて、夕方に なりました。おじいさん
も おばあさんも ももたろうさんが ど
んな 仕事をして くるか、楽しみに
待って いました。

すると、遠くから どしん どしんと
地めんを たたくような 音が して、家
が ぐらぐら ゆれだしました。

(地しんかな。)

おじいさんが、外へ とびだしたら、な



んと、ももたろうさんが 大きな 木を
かついで、一歩 一歩 ふみしめるように
歩いて きます。

おじいさんは、びっくりして おばあさ
んを よびました。

「おばあさん、おばあさん、たいへんだ。
ももたろうが 木を ひっこぬいて きた。」

を こしに ぶらさげ、日^ひが くれるのを
待^まって、ばけもの屋^やしきへ 出^でかけました。
長^{なが}い こと 人^{ひと}が 住^すんで いないので、
庭^{にわ}には 人^{にんげん}間の せたけほども ある か
れ草^{くさ}が はえ、ざわざわと 風^{かぜ}に ゆれて
います。

雨^{あま}戸^とは やぶれ、ゆかの あちこちが
ぬけおち、てんじょうには、くもの すが
いっぱいです。ふつうの 人^{ひと}なら それだ
けでも きみ わるく なって にげだす
のに、さすがは 勇^{ゆう}気^きの ある おさむら
いです。

一^{いち}ばん 広^{ひろ}い ざしきの まんなかに
どつかと すわり、こしの ひょうたんを
はずして、ちびり ちびり お酒^{さけ}を 飲^のみ
はじめました。

でも、いつまで たっても おばけが
出^でて きません。



うめの おばけ みに なつた



む

かし、ある ところに ばけもの屋
しきと いわれる 家いえが ありまし

た。おそろしい おばけが 出でると いう
ので、日ひが くれる ころには だれも

近ちかよる ものが いません。

ところが、この うわさを 聞きいた お
さむらいが、

「何なんだ、おばけぐらい。わしが たいじし
て やる。」

と 言いって、お酒さけの 入はいった ひょうたん



すると、口^{くち}が 耳^{みみ}まで さけ、きばを

むきだした おばけが 出^でて きました。

「何^{なん}だ、その 顔^{かお}は。つのが なくちゃ

おにも なれないじゃ ないか。」

おさむらいが からかうと、こんどは

ほんとうに おにが 出^でて きました。

「ちつとは こわそうに 見^みえるが、おに

なんて めずらしくも ない。」

それを 聞^きいて、ろくろ首^{くび}や かさの

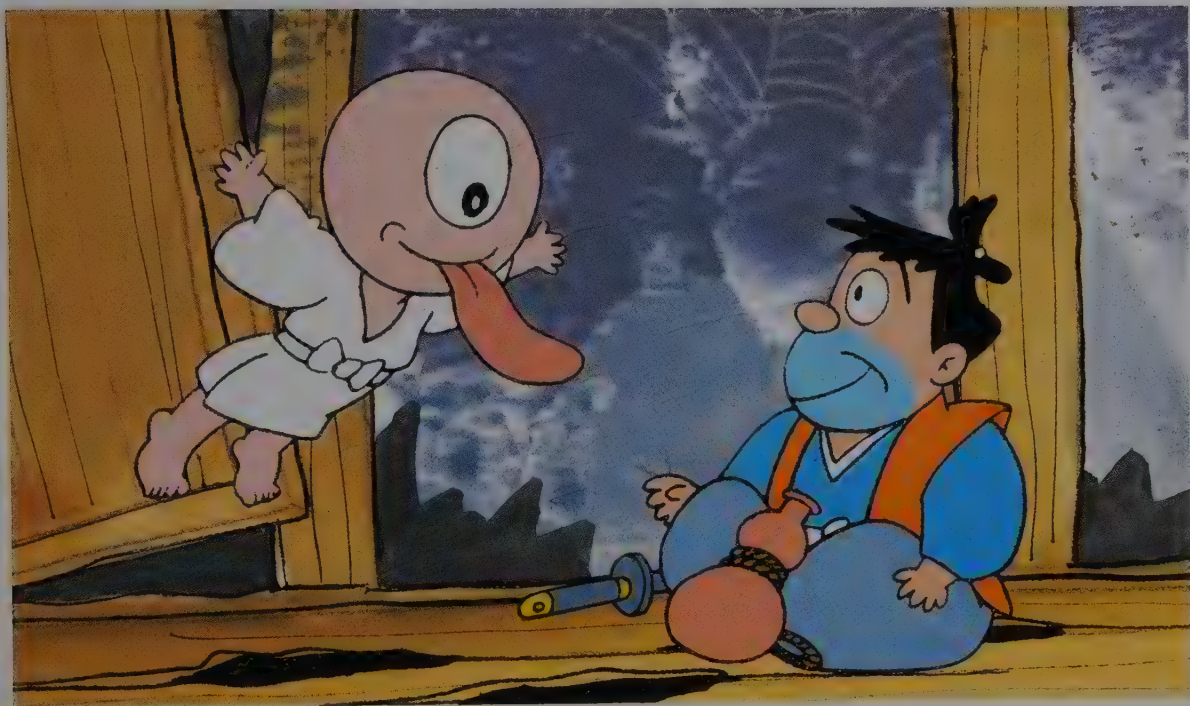
おばけなど つぎつぎと 出^でて きました。

おばけたちは、わに なって おさむら

いを とりかこみました。それでも おさ

むらいは 平^{へい}気な 顔^{かお}で、

「そんな ところに 立^たって いる だけ



「何を なに ぐずぐずして はや いる。早く で 出て こい。」

おさむらいが、どなりました。それでも
あたりは おと しいんと ひと して、もの音 ひと 一つ
聞 き こえません。

その よなか うちに にじ だんだん よ 夜が かぜ ふけて
夜中の にじ 二時ごろに かぜ なりました。どこか
らとも かぜ なく かぜ いやな かぜ においの かぜ 風が
ふいて おも きたかと おも 思うと、

ひゆううん おも だろどろ……。

一つ目 ひとめ こぞうが なが あらわれました。長い
したを だ 出したり ひ 引っこめたり なが しなが
ら、おさむらいの なが まわりを なが ゆつくり
まわります。でも、おさむらいは なが びくと
も なが しません。

「なんだ、なんだ。一つ目 ひとめ こぞうなんて
ちつとも なが こわく なが ない。もつと なが ぞつと
するような なが おぼけは なが いないのか。」



「何ぞ、酒のさかなになるようなものを^だ出してくれないか。」
と言いました。

すると美しい花がぱっと消え、
小さなうめのみになって、ころころ
つところがりました。

おさむらいはそのうめのみをす
ばやく口^{くち}に入れるやいなや、がりつ
とかみくだいてお酒^{さけ}といっしよに
飲^のみこんでしまいました。

そんなことがあつてから、この屋
しきにはもう二^にどとおばけが^で出な
く^なったそうです。

(福岡県の昔話)

なんとすてきなお化けでしょう。まるで楽しいお化け
ショーを見ているような気分です。こわいものから美し
い花への変身も見事で、思わず拍手したくなります。し
かも、最後は梅の実になって、酒のさかなになるとい
うのですからお笑い要素もたっぷり。こんなお化けの出る
屋敷なら、さむらいでなくても、出かけたくなります。

じゃ、おもしろくもない。みんなでお
どれ。」

と言いました。こまつた おばけたちは
いつせいに おどりはじめました。

「いいぞ、いいぞ。」

おさむらいは お酒を 飲みながら う
れしそうに 声を かけました。

そ

のうちに おばけたちの すかたが
消え、ざしき 一めんに 花が さ

きました。うめ、もも、さくらの 花が

かさなるように 広がり、お花見を して
いる 気分です。

「何て きれいだ。」

さすがの おさむらいも、その美しさ

には 目を みはりました。ちびり ちび

り お酒を 飲んで いる うちに、お花

見らしく お酒の さかなが ほしく な

りました。そこで、





やれ、うれしやと 思おもつたら、目めが さめ
た。」

それを 聞きいた おばあさんは、
「それじゃ、早はやく ほりに 行いきましよう。
むかしから お正月しょうがつに 見みる ゆめは ほ
んとうの ことだと いいますよ。」

と 言いって、急いそいで 起おきようと しまし
た。すると おじいさんが 言いいました。

「あわてちゃ いけないよ。むかしから、
しあわせは ねて 待まてと いうじや な
いか。」

「なるほど。それじゃ、ゆっくり ねて
いましょ。」

おばあさんは、また ねどこに もぐり
ました。

と ころが、この 時とき、家いえの 前まえを 通とお
りかかった となりの よくばりじ
いさんが、二人ふたりの 話はなしを 聞きいて いました。

しあわせは ねてまて

と

んと むかし、ある ところにお
じいさんと おばあさんが いまし
た。ひどい びんぼうでしたが 二人とも
心の やさしい 人でした。

ある お正月の 朝、目を さました
おじいさんが、ねどこの なかで おばあ
さんに 言いました。

「おら、いい ゆめを 見た。うらの 畑
に 大きな 木が あるだろ。その 木の
根元を ほって いたら、小ぼんの どっ
さり つまった つぼが 出て きてな。」





よう。家のなかにまるいつぼがころがっています。

「だれがこんなことを。」

言いながらつぼのふたをとったら、あれまあ、ぴかぴかの小ばんがどっさりつまっていました。

おばあさんはとびあがってよろこび、「やつぱりおじいさんのゆめはほんとうだ。」

と言いました。すると、おじいさんにもここにこして、

「ほらね、しあわせはねて待てば、むこうからやってくる。」

と言いました。
(長崎県の昔話)

おうちの方へ

どんなに貧しくても心のやさしい人間は必ず幸せになれる。そんな昔の人たちの思いをほのぼのと伝えてくれる昔話です。すてきな初夢をみても、あわてず、ゆつくりと寝て待ったからこそ小判のつぼがとびこんできたのです。昔の人たちは、正月にいい夢が見られますようにと、わざわざ宝船の絵を枕の下に入れて寝ました。

(しめしめ、いい ことを 聞いたぞ。)

よくばりじいさんは、さつそく くわを
持つて 畑の はたけ ところへ 行きました。大
きな 木の 根元を ねもと ほつて みると、ど
うでしょう。まるい つぼが 出で きま
した。

「ありがたい、ありがたい。」

よくばりじいさんは 大よろこびで つ
ぼを かかえて、自分の 家にもどりま
した。

ところが ふたを とつたら、なかは
石ころだらけ。いくら さがしても、小
ばんなんか 一まいも 出で きません。
(なんだ、なんだ。あの じじいめ。よく
も だましやがったな。)

よくばりじいさんは すっかり はらを
たて、その つぼを かかえて となりの
おじいさんの 家に行き、



「この うそつきじじい。」
と 言うなり、まどから 家の なかへ
投げこみました。

バリバリ ドッスン。

おじいさんと おばあさんは、びっくり
して とびおきました。すると どうでし

ほうに ぼっちり あかりが 見え^みました。

きこりが 大^{おお}よろこびして、あかりの

ほうへ 近^{ちか}づいて いったら、山^{やま}の なか

とは 思^{おも}えないほど りっぱな 家^{いえ}が た

って いて、美^{うつく}しい むすめさんが 出^でて

きました。

「帰^{かえ}り道^{みち}が わからなくて こまっ^{こま}て い

ます。今夜^{こんや}、一^{ひと}ばん とめて くだ^{くだ}さい。」

きこりが たのむと、むすめさんは

「なんの おかまいも でき^{でき}ませんが、ど

うぞ えんりもなく とまっ^{とま}て いっ^いて

くだ^{くだ}さい。」

と 言^いいました。むすめさんは、おやじさ

んと 二^{ふた}人で 住^すんで いて、二^{ふた}人とも



よめさんに なつた ゆちょうの 木の精

む

かし、ある村に、わかいきこりが
がおつかさんと二人で住んで
いました。

ある日のこと、今まで行ったこ
とのない山へ行き、道にまよつて
しまいました。

だんだん日はくれてくるし、おな
かはすいてくるし、

(どうしよう。)

と、思いながら歩いていたら、遠くの



だてが よく、それに たいへんな はたらきものでした。

きこりも おつかさんも うれしくて、
毎まいにち日が ゆめのように すぎて いきま
した。でも、どう いう わけか、むすめさ
んの 体からだは つめたくて、まるで 木きの
はだに ふれるみたいでした。



あ

る 年とし、ごの すきな とのさまが、
ごばんを つくる ことになり、
「みごとな いちようの ごばんを つく
った ものには ほうびを つかわす。」
と いう おふれを 出だしました。

さあ、それを 聞きいた きこりたちは、
いっしょうけんめい いちようの 木きを
さがしました。

でも、ごばんに できそうな 木きは、な
かなか 見みつかりません。

ところが、この わかい きこりは、む
すめさんの 住すんで いた 山やまの なかで、
大おおきな いちようの 木きを 見みつけました。

きこりは よろこんで、その ことを
よめさんに 話はなしました。

すると、よめさんは 青あおく なり、

「あの いちようの 木きを 切きるなんて
とんでもない。ほうびは ほしく ないか

きこりを しんせつに もてなして くれました。

見れば 見るほど きれいな むすめさん
んで、きこりは この むすめさんが、す
っかり 氣に入^きって しまいました。そ
こで、思^{おも}いきって おやじさんに たのん
で みました。

「むすめさんを、おいらの よめに くだ
さい。」

すると、おやじさんも はたらきものら
しい きこりが 氣^きに 入^いり、

「だいじに して くれるなら、むすめを
あげよう。」

と 言^いいました。

きこりは とびあがって よろこび、つ
ぎの 日^ひ、むすめさんをつれて、家^{いえ}に

歸^{かえ}って いきました。

きこりの もらった むすめさんは、氣^き





「どう した、おっかさん。」
すると おっかさんは、またまた なみ
だを ながして 言いました。

「お前^{まえ}が 出^でかけてから、よめが ひどく
苦し^{くる}みだして…。ふとんに ねかせて せ
なかを さすって やったが、みるみる
細^{ほそ}く なって、とうとう 消^きえて しまっ
た。」

「ああ、いちようの 木^きさえ 切^きらなかつ
たら。」

きこりも、ないて くやしがりしましたが、
もう あとの まつり。

よめさんは、なんと いちようの 木^きの
精^{せい}だったのです。
(宮城県の昔話)

おうちの方へ

いちようの木の精が人間のお嫁さんになるというファンタスティックな昔話。昔の人たちは、どんなものにも生命があると信じ、時には人間と結ばれると考えていました。しかし、こうした異類は一生そいとげることができず、必ずもとの姿にもどってしまいます。だからこそ、いつまでも心に残る話になるのです。

ら、やめて ください。」

と 言いました。

それでも、きこりは ほうびが ほしく
て、その ばん、よめさんの 止めるのも
聞かずに とびだして いきました。

「なんて みごとな 木だ。これなら す
ごい ごばんが できるぞ。」

きこりは、さっそく 木を切りはじめ

ました。

一ばん かけて、やっと たおすと
その 木を 運びだす ため 家へ もど
って きました。

ところが どう したのか、よめさんの
すがたが ありません。目を なきはらし
た おっかさんが、ふとんの 前で しょ
んぼり すわって います。





が、ふぐは 人が 食べようと した 時、
どくで ころそうと したから じごく行
きじゃ。

「そんな むちなな。どくを とったら、
ひらめより ずっと おいしいのに。だか
ら わしも ごくらくへ 行かせて くだ
さい。」

「だめ だめ、もし どくを とる 人が
いなかったら、お前は おそろしい 魚だ。
こいつを じごくへ 送って しまえ！」

えんまさまが おにに めいれいしまし
た。すると、ふぐは おにに たのみまし
た。

「じごくへ 行く 前に、ちょっとだけ
ごくらくを 見せて ください。」

おには 少しぐらいなら いいだろうと
思い、ごくらくの 門を 開けて やりま
した。その とたん、ふぐは さつと 門
の なかへ にげこみました。おこった
おにが、

「こら 早く 出て こい！」

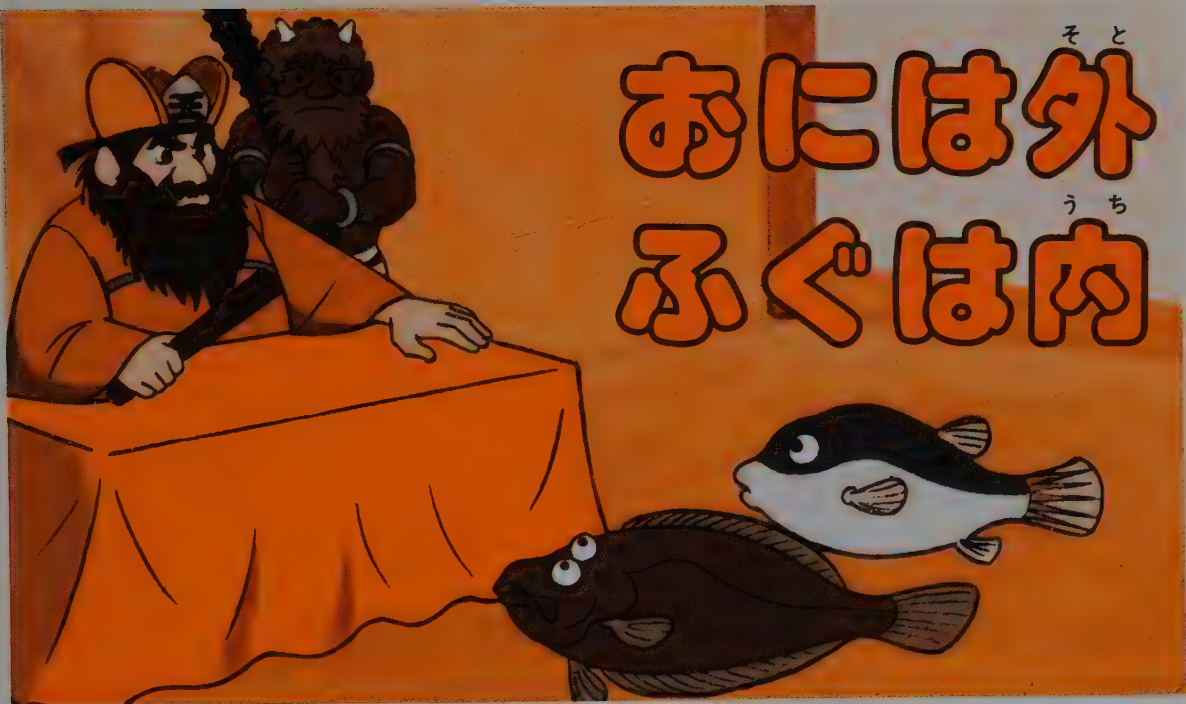
と どなったら ふぐが 言いました。

「おには 外、ふぐは 内！」

(香川県の昔話)

おうちの方へ

ふぐとふくをひっかけ、「言葉あそびのおもしろさを生
かした笑い話。「鬼は外、福は内」の言葉がなによりもき
らない鬼であれば、いまさらどうすることもできません。
でも、この程度の言葉のしゃれなら幼児にだって理解で
きるでしょう。魚でも死ぬと極楽を願う。仏教を信じて
きた昔の人にとって地獄ほど恐い所はなかったのです。



おには外^{そと} ふぐは内^{うち}

だ

れでも 死んだら、おにどもを け
らいに した えんまさまの 前^{まえ}に

つれて いかれ、ごくらくへ 行くか、じ
ごくへ 行くか、きめられるそうです。ご
くらくは いつも 花^{はな}が さいて いる
すてきな ところ です。

でも、じごくは 血^ちの 海^{うみ}や、はりの
山^{やま}が ある おそろしい ところ です。生^い
きて いる 時^{とき}に、いい こと を した
者^{もの}は ごくらくへ 行^いけますが、わるい
こと を した 者^{もの}は じごくへ 送^{おく}られま
す。

ある 時^{とき}、ひらめと ふぐが えんまさ
まの 前^{まえ}に つれて こられました。えん
まさまは ひらめと ふぐを 見^みくらべて
言^いいました。

「ひらめは 人^{ひと}に おいしく 食^たべられた
から ごくらくへ 行^いかせて やろう。だ

がたが 見えなく なると、すぐに とび
だして きて、なつぱの めを 食べます。
(何とか うさぎを やつつける くふう
はないものか。)

おじいさんは いっしょうけんめい 考



えました。

「そうだ、いい ことがある。」

つぎの 日、おじいさんは 畑に 立て

ふだを 立てました。すると そこへ き

つねが やって きて、立てふだを 読み

ました。

「なにに、『きつねの くせに なつぱの
めを 食べるな』だと。わしが いつ な
つぱの めを 食べた。人の せいにな
るなんて とんでもない やつだ。とつち
めて やる。」

はらを たてた きつねは 草むらに
かくれて、はん人が くるのを 待ちまし
た。

す

ると、うさぎたちが やって きて、
なつぱの めを 食べはじめました。

きつねは、草むらから とびだして 言
いました。

うさぎを 追^おっぱらった きつね

む

かし、ある ところに、とても
こうな おじいさんが 住^すんで い
ました。

ある 日、畑^{はたけ}に きて みると、うさぎ
が たくさん いて、なっばの めを 食^た
べて いました。

「こら、何^{なに}を する。」

おじいさんは、あわてて うさぎを 追^お
っぱらいました。でも、おじいさんの す



■著者紹介——西本鶏介(にしもと けいすけ)

1934年奈良県に生まれる。国学院大文学部卒。
昭和女子大学教授。評論家、民話研究家、童話作家として幅広く活躍する。著書は数多くあるが民話の本に『世界の民話館』(全10巻)、『日本昔話集』、『日本伝説集』、『日本笑い話集』、『日本怪談集』などがある。

■アニメ画 監修——杉山 卓

西村緋祿司／才田俊次／早原栄次／
鈴木順子／鈴木康彦／井坂純子／
長岡みどり／中村亜貴子／志村隆行

■一日一話シリーズ

読みきかせ

小学館版

日本昔ばなし ②

1988年1月1日
1999年12月10日

初版第1刷発行
初版第22刷発行

著 者／西本鶏介

発行者／田部井満男

発行所／株式会社 小学館

東京都千代田区一ツ橋2-3-1 郵便番号 101-8001

電話／編集・東京03-3230-5447

制作・東京03-3230-5333

販売・東京03-3230-5739

印 刷／共同印刷株式会社

©1987年 株式会社・小学館

Printed in Japan

ISBN4-09-101302-3

●造本には十分注意しておりますが、万一、落丁、乱丁などの不良品がありましたら、「制作部」あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

【注】日本複写権センター委託出版物本書の全部または一部を無断で複写(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(☎03-3401-2382)にご連絡ください。

「やい、よくも わしを わるものに してくれとな。そんな やつは ころしてやるから かくごしろ。」

うさぎたちは、何の なん ことだか よく わかりません。でも、きつねに ころされたいへん。みんな おお 大あわてで



げて いきました。

それでも きつねは くやしくて なりません。

「ばかに するな。」

と 言^いって 立^たてふだを ひきぬき、めちやめちやに たたきこわして やま 山へ もどって いきました。

(しめしめ、うまく いったぞ。)

さつきから かくれて この ようすを見て いた おじいさんは また はな 畑になつぱの たねを まきました。

でも、そんな ことが あつてから、うさぎたちは もう に 二どと はな 畑へ やつてきませんでした。(岐阜県の昔話)

おうちの方へ

うさぎはやさしそうな顔をしていても、なかなか狡猾な動物です。ですから神話や昔話の中でもしばしばずるがしこい性格が与えられています。しかし、人間の知恵にかかつてはどうにもなりません。その狡猾なうさぎを、これまた利口なきつねをだまして追い出し役をさせるところにこの昔話のおもしろさがあります。

楽しいビデオで
夢いっぱいのお話を…。



小学館



①～④巻 好評発売中

- ①一寸法師 他3話 ②桃太郎 他3話
③かぐや姫 他3話 ④浦島太郎 他3話
⑤巻 さるかに合戦、他3話

小学館の日本昔話シリーズ

ビデオ **ママお話をさせて** 全5巻



B20取・140ページ

毎日一話、母と子で楽しめる
お話アニメ絵本!

小学館版 お話アニメ

一日一話シリーズ

ママお話をさせて

大好評発売中!



San Mateo
Public Library

お子さまの情操を育てる
読みきかせ

日本昔ばなし ②



よめさんに
いちようの
木になった
精



おぼうさんに
ばけた
古だぬき



えびと
ふぐの
たこと
おどり



まめに
なれない
とうふ

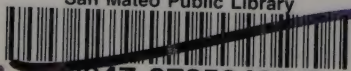
ISBN4-09-101302-3

C9493 ¥950E



9784091013026

San Mateo Public Library



M 3 9047 07859465 8

定価： 本体950円 + 税

雑誌 61633-02



1929493009507